

# 高校生の口演劇入門

五島千尋

Architectural Practice System





# 目次

まえがき	
まえがき □はボックスシステムだ。 . . . . .	3
新しいメソッドの習作あるいは目覚めたシステムの黎明	
I . . . . .	7
幕間 図画説明	
. . . . .	19
新しいメソッドの習作あるいは目覚めたシステムの黎明 その二	
II . . . . .	23
幕間 図画説明二	
. . . . .	35
新しいメソッドの習作あるいは目覚めたシステムの黎明 その三	
III . . . . .	39
幕間 図画説明三	
. . . . .	53
あとがき	
あとがき 嫌儲を撲滅するなんてできない。 . . . . .	57
嫌儲の次に現れたのは「ググレ、○ス!!」 . . . . .	60
おまけ／消費税分のサービス	
デウス・エクス・マキナ論 . . . . .	69
わかりやすさの陥穽 . . . . .	79
広告	
. . . . .	87



まえがき



まえがき □はボックスシステムだ。

タイトルに□があるのは、キャプションに書いてある通り、埋め合わせ問題のような、空欄は読者によって変わる、という意味が込められている。

本物の高校生が読むとは、実は設定していない。

年代的にも、2020年代で30才から50才までの範囲でギリギリ知っているネタである。私自身も、野田さんや鴻上さんが世に出て来るのを伝聞でしか知らない。

何か知らない語句があったら、検索にかけて調べてもらうか、図書館や新古書店で古い本を読んでもらうしかない。

あくまで、ゲーム開発の副産物でSシステムの更新を図ろう。そういう思惑があった。それは頓挫したけれど、どうやったら、Sシステムことスタニスラフスキーシステムを更新できるのか、という

四角（□）はいろいろと、埋め合わせで、読者に自由にに入れてもらう事が出来る。

そして、ボックスシステムでもある。巡業するのに運びやすい、組み立てしやすいセットである。

しかし、ボックスシステムの内側に何を作るのかは、自由なのである。

その自由には、明白な落とし穴がある。



新しいメソッドの習作あるいは目覚めたシステム  
の黎明



# I

私には、演技のメソッド、あるいはシステムが無い。

今まで、無かったのが、おかしかった。

それでは、作ろうという、そういう話である。

モダニライゼーション、ではなく「シルエットアクター」というゲームを作ることに  
よって、本来はシステムが出来る。シルエットアクターズシステムを副次的に作る。だ  
けど、それはゲーム業界に受け入れてもらえなかった。

だから、作る。

富野監督もシステムやメソッドを持ってない。

演劇センスを養えと、それをやっても、ゲーム業界では通用しない。

オリジナルのシステムかメソッドを持っていなかったら、評価されない。労働賃金を  
もらえない。口酸っぱく言わないと、勘違いする人がいる。

努力してないとか、いじめられるよ。

事実ありのまま、言う。

それが後進に対しての誠実だと思っている。

「次はお前だ。お前がやれよ」

まあ、努力と言うのは、エラい人に利益をもたらす事であって、自分のためじゃない。  
ここから『資本論』の影響を受けた共産主義的な、運動も演劇ではあった歴史は、読者  
も耳がタコになるくらい聞いたり読んだりしただろうから、避けるがマルクス主義者な  
ら「商品から労働者は阻害されている」と言うだろうし、それと一緒に、だからプロレタ  
リアート文学や演劇があると。

齋藤メソッドやともかく何かで補う、「蜷川幸雄と富野喜幸」で同じネタをすと思う  
が、身体の動きを俳優もアニメーターもできない話が話題にされるだろう。

その身体のメソッド側を牽引していた、第三世代の後期型メソッドは期限切れになり  
つつある。代用品が古い、と言ってしまふとちょっと文句が出ると思われるが、耐用年  
数が限界に達していると考えられる。ファンがついて、公演したら劇場を満杯になる  
ころは、気にしなくていい。

しかし約40年も経ってれば、それは古く、エンジンアストでなくても車の修理を  
始めるように、イジる。場合によっては、新車を買う。もちろん新車に乗らず、部品取  
りのために。

反論は百年前のスタにゃにゃスキーシステムはどうなんだ？ と。

その問題をまず整理して、だからこそ今、新しいシステム、再起動のメソッドが何か  
必要だと。それはなんなのか？

いわなくてもわかるのは、基本シルエットアクターズシステムはミラーニューロンを鍛える、シルエットメソッドが基調になる。

抽象的なものを視覚的に捉えるのは脳内の“シルエットニューロン”が発達しないと、いけない気がする。扁桃体にあるとされ後天的に上書きも可能とされる。くも派とへび派に恐怖症が分れるが、先天的にこの扁桃体のニューロンがDNAから形成されているようだ。私はへび派。

こうした脳科学、ニューロニズムが基礎になり、そこから枝葉のように、シナプスが広がるように広がっていくのだが、訓練させて発達させるか、優生型を選別するか、わかりやすく前者が努力させて習練するか、後者が天才を見定める事になる。

基本的に演技のシステムとメソッド（違いは後述）は、前者をなんとかするためにあり、スタにゃにゃスキーシステムはまあ凡人を演劇人にするのである。

人のモダニライゼーションの方法というか、俳優の演技にはちゃんとシャドープレイ、ミラーシーケンスがすでにある。シルエットアクターズシステムは後に語る。

昔、千葉マリーンズがやっていた反射神経の機能向上のやり方（動体視力を鍛える？）、だから少し、ゲームソフトも使う。『言ってはいけない』の方だったか、頭に電極付いたヘッドギアを被って『パックマン』を一日一時間する高橋名人イズムの脳機能を調べる。松永兄弟イズムは全女。かつてあった女相撲の興行を戦後に改めて・・・詳しくは『暴力の解剖学』にある。（読むとバイオフィードバック法は『ゲーム脳の恐怖』の精緻な反論であるのでは？）

たぶん、最初に俳優たちをチェックした時に、オーディションよりもミラーニューロンがちゃんとしているか、調べる。

アルコールで抹消神経が動かなくなる、それを調べるのがあって、その応用やわざわざ書くと、非侵襲的脳機能測定法（脳の非破壊検査）、主にNIRSを使う事になるだろう。川島隆太教授と共同開発したい！

もしかしたら、身体に障害があるのを、発見する、身体可動チェックも行うことになる。んで、ベースボールオペレーションシステムのように、なんかアクターズオペレーションシステムのような、名前が付く。「シド・ヴィシャス理論」みたいな、そういうゴトチヒ理論で作る俳優・演劇トレーニング法。

脳は鍛えられる。残念な事に原発事故が起きた地域の人々の脳を調べると、放射性物質に汚染された食物を摂り、大脳新皮質に物質が残っていると、ガイガーカウンターが「線」を感知してわかっている。脳が成長しないなら、物質がそこに留まらない。

ブレイントレーニングの根拠の一種になるだろう。

今までの定説は脳は萎縮するばかりで「成長」しないとされていた。私はマッドサイエンティストだから、人体実験をしたい。『戦え！ 軍人くん』のように、「マッドがつくんですか？」と言われたい。脳髓の模型を手にとって、演劇のフランケンシュタイン博士。

役者達を集めて、『バトルロワイヤル』のギャグと同じように、「君達には私の人体実験の被検体になってもらいます」と、ビートたけしが言うみたいに首をカクカク。

「ぼくたちはフランケンシュタイン博士が作ったクリーチャーじゃない！」と藤原竜也みたいに、反抗してもらいたい。

ルドロジーだけど、考えているのは、ミラーニューロンという摸擬に対応する脳神経

があるなら、競争に対応する脳神経、運に対応する脳神経、眩暈に対応する脳神経があるのではないか。(眩暈にはたぶんクオリアがあてはまる)

メンデレーエフの周期表で元素発見が予想されるみたいに、対応する脳神経はいずれ、発見される。脳内物質はすでに、エンドルフィンが競争、快樂物質と言われるドーパミンが運だろう。

解明されても、リアクションはフランケンシュタインと同じ。

…アインシュタインと同じ。

何の感動も無く、「うん。知ってた」と、答えるだろう。フロイトの時代にすでにニューロンは発見されていて、十分予測可能だったのでは？ (フランケンシュタインと同じだとクリーチャーである藤原竜也が暴れだし花嫁として鈴木杏ちゃんが…近代劇的?)

むしろ、こういう事ができない人は、ゲーム開発者として、足りない。

マンガ家がキャラクターの絵を描くと、描いている表情と自分の顔の表情が同じになる、「BSマンガ夜話」の視聴者には当たり前の共通認識情報があるが、それはミラーニューロンが表情筋を動かしているのではないか？

けっこう、シンプルな答えが出そうである。たしかに、私も『ベルセルク』でガッツを鶏姦する人を描く時、同じ顔になっている。(はず)

島本和彦さんはシルベスタ・スタローンそのままな顔になる。サブミリナル鷹を描いている時はネプチューンマンみたいな顔になっていたはず。

人類学的には、そうした表情のミラーリングをしないと、狩猟採集生活社会は受け入れられないのではないか？ 狩猟にしろ、採集にしろ、獲物や採った物を分配しようというのには、社会性が必要だろう。

日本には鈴木メソッド、出口メソッドがあるので、そちらを借りるのが、てっとり早い。それでは評価されない。ウソじゃなくて、現実に評価されない。

石塚運昇さんや吉田鉦太郎のシアター出身者である彼らと呼ばば、出口メソッドの一端を周りに教えて、別名義の人たちは、吸収する。

アニマルエクササイズの話、これは蜷川さんの『身体的物語論』でも、似たようなことを語り下ろして語っている。

『冬眠する熊に添い寝してごらん』では、中西晶くんが、犬の役をやる。芝居の勉強をしてこないから、稽古場に入れないというショック療法を施し、新日本プロレス入団テストに落ちた棚橋みたいに稽古場近くに来て、哀しそうな顔をしていたから、情けをかけられて、犬の役を与えられる。

アニマルエクササイズから、始める。

ただ困ったことに、この戯曲、新潟市内の悪口を書かれているのに、県立図書館に所蔵されている。確かに、乱立しているわけではないが尖塔のある平屋のラブホテルがある。ポンプで水を抜いて、干拓した土地だから地価が安い。ベース電源が震災・テロで落ちたら、一帯が水に浸かる。だから土地の利用価値としては、どうしてもそうなる。繰り返すが地価が安いから、利用法がラブホになり、それを古川さんにいじられている。

それが触れられているってだけで、県立図書館に出版された戯曲本が所蔵されている。新潟に触れているから。話しのオチではないが、くだんの県立図書館がそのポンプで造成された水抜き干拓地にある。近所に例の尖塔のあるご休憩場もある。

回転寿司屋の方は、これは言わなくていいか。聖地巡礼でお確かめください。

さて狂言師はアニマルエクササイズをしていた。アニマルエクササイズではじまり、動物訓練で終わる。

サルを演じ、狐を演じる。

『うつぼ猿』で初舞台を踏む。用語で言えば、被くである。

猿芝居とは、ここから転じて言われるようになった、派生した言葉ではないのか。猿引きが猿にさせるパフォーマンス一式を猿芝居と言っているのも、あるかもしれない。子供だから、現在の学芸会、その前のお遊戯会の出し物でおサルさんかわいいねえ、と甘くみてもらえる。点が甘い。

申楽が下に見られていた時代もあったとされるから、違うと思うが。

マルセ太郎のサルのものまねは、見た事は無いが、絶品であったと、語られる。ここで、「ウパー」と言うと、読者から笑いが取れる。

動物訓練の集大成としてあるのか、キツネでトレーニング、『釣狐』は狂言師が最後に被く演目である。人は猿からキツネに進化した生き物の進化論として、「早く人間国宝になりたい」である。

私の自論は、動物訓練はあがり症対策と思われる。

とくに新人さんはテレビで観た大物俳優や、普段芝居を観てなくても美男美女に囲まれると、どうしてもあがってしまうだろう。そこで動物になり、

「お前は今、チンパンジーだ。あがったりしない」

と、メソッド演技でも言われていると、思われる。

セリフもほぼ覚えなくていい。板の上にとりあえず立つ。狂言の世界ではおじいさんが諭す。「お前今、子猿だから、桧舞台の上でも、緊張しないよ。おサルさんだからね」と孫に言い聞かせる。

で、父親が叱り飛ばす。(萬斎のドキュメント番組であった事、そのまま書いている)

次の段階が、狂人の演技。リリパットアーミーを興した中島らもさんも、狂人の芝居はラクだと。オーバーアクトでわかりやすい。(後述の縦の演技)

次に、ゾンビの演技であろう。お決まりのメイクをして、緩慢な動きをする。ゾンビをする人に演技力を求めない、低コストでパニック映画を作れる苦肉の策だったはずが、なぜかゾンビにならぬかのメタファーを求めるようになり、それに私も異論は無いが、後付だろう。

後付は「じゃじゃ馬馴らし」は、少年俳優(それも変声前)に女形の訓練をさせる、そのメソッドの結果発表を板の上に出して、「こんな少年でも女形を演じることが出来るんだ」と、性倒錯的な見方は結果として見えている解釈に過ぎない。ゾンビと同じである。モールに繰り返し買い物へ行く人と見立てている社会批評的な事はあ・と・づ・け、らしい。(B級パニック映画だったから、つまり遊びの四分類のめまいを映画館に行って撮取している)

カタリナとダンナ(ペトルーキオ)は演出家と俳優。亭主と嫁の関係じゃない。演出家が「これ熱した火箸だ」と言われてモノを掴んだら、手の平に火傷痕のようなモノが残る伝説みたいな、そういう風になってほしい俳優訓練戯曲、なのか?

ヴァイオラは美少年が元で、女性を演じるというのは、近代になってからで「ピグマ

リオン」こと『マイ・フェア・レディ』はこうした戯曲の近代化ではなかったか。女形エクササイズを女性に転用、女形訓練を今度は女性にして女優を作るという職業女優の誕生とその問題点や限界、奥山さんが『RAMPO』を撮っていた時に、羽田晶紀と恋愛？

でも、それは映画を撮っている間の、マジックアワーに過ぎない。奥山さんにとっては思い出になっていると『黙示録』で語られている。

そこから勘案するに、狼少女を演じる事やヘレン・ケラーこと「奇跡の人」はスタにゃにヤスキーシステム依存の戯曲だったと、考えられる。アニマルエクササイズを舞台の上に出す、トレーニングの実践が見られる。

板に上げるまで、練ったモノを出さないといけない。

たぶん、アニマルエクササイズからクレイジーエクササイズ、さらにクリーチャーエクササイズ。そしてモンスターエクササイズで、テレビゲームに応用するのは…なんだか遺題継承の答えを品が無く書きちゃった気もするが、とはいえゲーム開発の現場では、言われなくてもできている。

その事実は言わずもがな、である。

これでわかるように、『あり思』第三巻はいつまでたっても、終わらない。下北沢の飲み屋で若者たちがかわしている演劇論の・ようなモノをえんえんマンガに描いても、ちっとも話がすま虫である。ずっと演劇論の話が続いて、「シルエットアクター、終わんねえじゃねえか」と、ビートたけしが言うみたいに首をカクカク。

「ダンカン、このヤロ」

今までの話から、狂言師がヘレンや狼少女を演じるのが、いいのでは？ そんな逆算が考えられ、実践である検算はなかなか実現しないが、一度はやってみたい。だから、演劇という美学の狂科学者として「シルエットアクター」を開発したかったのである。（作中でフルカが担当回の動物訓練についての面がある）

それで、アニマルエクササイズ、ブレヒト派の鴻上さんの本には、無い。

『演技と演出のレッスン』の後期スタにゃにヤスキーを含めた事が書かれた必読書だ。（とくに新潟県では主要な図書館に「俳優修行」のシリーズが無い為、代用しないといけない）

鴻上さんはヘレンでも狼少女も芝居をつけられるだろうが、一つの本に頼ると、こうした限界が出る。（ゲーム開発者にならないなら『あり思』を読めばOK）

たしかに、ナチュラルとリアルは違う。縦軸の演技はパイディア、横軸の演技はリアルでルドゥスであろう。

前期スタにゃにヤスキーと後期スタにゃにヤスキーに分れる。『俳優修行』が二巻あるのは、そのため。

前期だけがメソッド演技、リー・ストラスバーグのやり方である。「まずは内面から」の川上には、スタにゃにヤスキーがいる。スクールで教わることができ、全世界に広まっている。だが、ストラスバーグのやり方では、後期の「形」が無いのである。

後は、情報の流出になるので、『演技と演出のレッスン』を直接読むことにしてもらおうとして、面倒だから、Sシステムと略してしまう。

ここまでの話でわかるように、だからシステムとメソッド（メソッド）は分れる。

私個人の分類法は、システムは精神と肉体もある統合された俳優養成の、まさにシス

テム（体系）であり、メソッドはどちらかというと、「まずは内面」の心・精神偏重型か、形・型・肉体偏重型に分れる。クラスに一人はいる演劇厨には、「そうじゃない」とちゃちゃを入れられる。

「俺は高校に入ったら、『アルプススタンドのはしの方』を越える戯曲を書くんだ」と、イキった子供に何と説得すれば、いいのだろう。どうやったら伝わるだろう。（「真実への鉄拳」を観た後なら、リングの上で決着をつけず、降りて平地でやって負ける高校演劇の小説の主人公はこういう事言うのかな？ 感情移入できないキャラクター）

「ありえない未来の思い出たちのマンガを読んでも、別にゲーム会社に入社できて、労働賃金がもらえるわけではない」

と、本当のことを書かねばならない。

大学まで子供を通わせるお父さんお母さんは、余裕が無いから、もう早く社会に出て、役に立つこと＝労働賃金化できることを求める。

「単純明快でしょ」

「Sシステムを知っているし、できるよ。『アクタージュ』がジャンプで連載する前からね。それがどうしたって業界だ」

ゲーム業界で、よく考えるまでもなくSシステムを理解してなかったら、3Dポリゴンのキャラクターに演技を付けられない。ちゃんとそれを理解してもらうのが、『あり思』のめあて。

知能労働に偏重するから、肉体によったメソッドが必要になる。

つまり、鈴木メソッドが必要になる。よく修斗の合宿とたとえる、バシバシ床に竹刀を叩く、一見奇妙な風習のように見える歩行（習練技法の名前）である。田植えなどをして、下半身が普段から鍛えられている日本人の生活様式に合った訓練法で、シュートの合宿は、『真説・佐山サトル』を読めば、答えが書いてある。

歩行や舞踏、たけしなら二分間のビンタである。ミット蹴ってからビンタ。

心・精神型メソッドから解放されて、ブレヒトとか第三世代、劇団夢の遊眠社、劇団三〇〇（美輪さんに言われて改名した）、第三エロチカ、第三舞台があり、その反省で静かな演劇、現代演劇があり、そして「暴力という形而上学」の北野武監督が原爆投下のようにショックを与えて、ミット蹴ってからビンタ。

言われなくても、知っている戦後演劇史の昭和までの射程範囲である。これを踏まえないと、話にならない。

日本は心技体と言いたがる。

なんで言いたがるのか、それはつまり伝統偏重している。

それは一旦忘れて、考えてみると、何かぼんやりともうひとつ、文化伝統に偏るメソッド、がありそうで本当は「型」もこちらに含むだろう。型・伝統偏重メソッドである。このメソッド三位一体でシステムを作ろうという、試みである。

便宜的、暫定で二つ以上兼ね備えるのが、システムであろう。三つの円の面積が少ない。二つ以上のメソッドが重なるところが、自然主義系統、あるいは象徴主義系統に分れる。

Sシステムか反Sシステムなのが、わかりやすい分けだろう。

蜷川さんの本（前掲書）を読むと、やはり、若い俳優達は身体的なものが足りない。A

地点からB地点へスローモーションをすると、如実に表れる。

うまくいかないから、それじゃ野田さんがたまにやるスローモーションができないじゃないか、と思ってしまう。

足りないから中村ゆうじのパントマイムになるのである。関節の可動領域を増やす柔軟体操やヨガをしたり、芝居のために筋肉体操は正しい。

デジタル世代だから、上半身の発達ばかり、それもコンピュータを操作する知能労働ばかり、用法として正しくないが「頭でっかち」になっていると、そういう指摘している。

マイクを使う、というのも、ずっと蜷川さんが嫌っていたのだが、仲代さんの話では、少し俳優に人気が出るとろくにボイストレーニングもしていない俳優を板の上にあげてしまうと言う。いわゆる「事務所の意向」というヤツである。

菊川怜はいしかわじゅん先生がボイストレーニングが必要と、指摘していたが、人気先行すると、どうしても疎かになってしまう。

声帯の拡張装置、機械的声帯ドーピング、つまり声の近代化でもあるから、またこれも伝統偏重だろう。

ともかくも、それで多くの演出家に嫌われる。

声だけに、二度とお声がかからないこともあろう。

「芸能界は腰掛じゃないんだぞ」

と、思っている人も、中にはいて、キャストイング班に言ってるかも。「アニマルエクササイズからやりなおせ」と、蜷川さんならやらせる。新しい灰皿投げ。

こうしたトレーニング不足の俳優を演出しなくてはいけない。一ヶ月の短期間で速成栽培的に鍛えぬくのは、難しいから、中西晶くんみたいな事が起こる。ちゃんと芝居を勉強しないとイケない。

まだできていない俳優を送り込まれる事もある。

その中の一人で、木村拓哉が蜷川さんのところに行って、泣いて帰ってきたというエピソードはせつなくなるが、仕方ない。書籍でも語っている通り、蜷川さんはキムタクと「悪い時期に出会った」と回顧している。いい時期に出会ったというのが、白石加代子である。似顔絵を描く時、顔の輪郭線を描くには定規を使わなくてはいけない。

しかし、ホン合わせの時にはもう、もらった台本を覚えてくるという、蜷川メソッドというより、俳優としての気構えを教えてくれたことで出会ってよかった。(だから「教場」は蜷川さんに教わったことを披露する場であるという役者のコンテキストを踏まえているが、ドラマは見逃している。「くしゃがらー」は観た)

さてアニメーションの話之急に勝手にはじめるけど、いろいろな中から、小田部羊一さんが任天堂に入社し、カメレオンの作画を描いて、それがヨッシーになったとされる。

それは小田部羊一さんの影ではないか。(羊人同形論…)

たくさんの小田部さんの記事が小出しで出される。

まとめた大系化されたものが、必要になる。(「CONTINUE」の件は無視)

ただ、宮本茂さんの話では、誰とはいわないが、デザイナーにあたる人に挙動を一晩かけて描かせると、語っていた。それが小田部翁であるかは、判明していない。

ところが、3Dモデリングされたキャラクターが仮想空間にいと、そんなに時間をかけなくていい。一晩かけなくても、できてしまう。ピクサーは毎年映画公開可能なの

は、製作ラインが二つ以上あると思われるが、このように平面よりもスピードがあって、かける労働時間が少ないから、制作時間も少なくてすむ。

スピード重視になって、白山羊がいなくなるとか、失礼な事を書いてはいけない。

ボアジュースのCMを何度も繰り返す池田宏に誘われて、小田部さんは任天堂に入ったとされる。高畑も任天堂に所属していたら、左翼の牙城になってしまうところであった。

もしかしたら、あの悲劇も起こらなかった・・・なんの悲劇だっけ？ 『ゼルダの伝説』でもう一回『太陽の王子』のアニメ映画を作る。それは私が「ヴァリエント・オブ・ゼルダ ミラーシールド」でやったので、打ち止めである。ミラーシールドでゼルダ姫の光を集めてブーメランで、夢を見る島の倒し方と同じ。(羊人同形・・・どこかで小田部さんのリスペクトが入りたいけど羊飼いだともう『トワイライトプリンセス』でやっているからな)

任天堂に所属していたら、源平合戦のアニメ、作れていただろうか。

アニメーターはシステムやメソッドを作らないで、徒弟制をすることで、口伝的に作画演技を継承維持しているようである。多少、ミラーニューロンに頼りすぎて、断絶があったら、失伝するかもしれない。

町から町へ旅する大衆演劇の劇団のやり方に近い気がする。座長芝居。

座長がいて、今日の芝居のセットを決めるとか、マンガにしたヤツがあったのに、どこやったっけ？

\*狂言では？

こうした伝統メソッドの抽出、継承はうまくいかない事もある。狂言や能の流派が途絶えたとか、瓦解で途絶えたとか、そういう憂き目に遭うこともある。今、残っている流派は、まだ徳川幕府が存命時に名人と謳われた人が一度瓦解をやめて、復帰に関わった岩倉具視が能劇に熱を上げてくれて、能楽が現代まで継続する。(逆に言えば現行政府が弾圧に乗り出して人間国宝を与えない等で滅ぶかもしれない)

座長芝居を起源とするというか、股旅モノを芝居にかけて、劇団員に運動の、振り付けをつけるのが、意外に後詰め先詰めの、流派の違いが出るとか、何か見える。ディズニー起源というより、東映起源を遡ると、ここに突き当たるのでは？ 否定するとか、肯定する前に、とりあえず、並べてみて比べて検証してみるのが正しいだろう。

心理学的に、芝居をつけるというのは、やっていた頃がある。1980年代後半から90年代まで、心理学的に登場人物に行動させるというのが、流行った。

否定的な意味でとらえられると困るが、これは今でも片渕須直監督は、心理学的に正しい行動をすずさんにとらせていると、いう。(お友達に心理学者がいる)

精神分析よりの方、口唇期の芝居として「ちゅるちゅる」が『家族ゲーム』では見られる。母親役の由紀さおりに、フロイトの影響そのままの事を息子が言う。この頃の若い由紀さおりが、そのような事を言われても、おかしくない人で、伊丹さんに言われて車の中で密議をするのも、違う事をしにかけたような、セクシーさがある。原作未読のため不明だが、新しい映画は、新しい芝居から見せるという、新しい楽器が新しい音ゲーを作るという、動詞理論の応用に過ぎない。

ふと、北野映画は新しい芝居を發明して、まっちゃんはそれよりも一段階新しい芝居を見せられなかったから、映画監督として続かなかったと。

まあ心・精神の側面は、こうしてなんとか、補うことが出来る。

形・肉体はすでに触れた、パントマイムや何かダンスといったサプリメント的に副食として、摂らないといけない。

精神のコリオグラファー（振付師をカッコ良く言ってるだけ）とたとえばいいか。テキトーな事を言ったが、Sシステムは精神のコリオグラファーなのかもしれない。

つかこうへいさんのところに、みんな武者修業的に行く（つかさんが誘うこともあるらしい）のは、前期型で心・精神に偏ったメソッドだけでは足りない、なんらかの不足を自覚していた俳優が多かったと思われる。

統括されたSシステムはなかなか学ぶ機会が無く、モスクワ芸術座も、特に東西冷戦中はなかなか観れなかったので、それが小山内薫伝説を生み出したと思える。2に続けよう

続くのである。

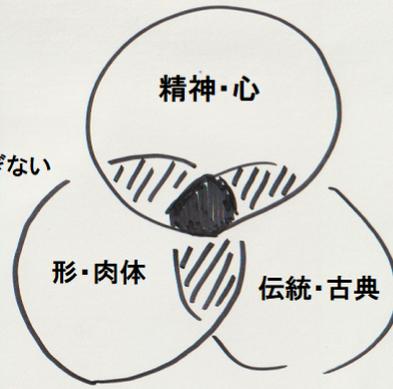


## 幕間 図画説明



## システムとメソッドは何が違うか

ひとつの円だけではメソッドにすぎない



重なっているところが基本システム

gazou01.jpg



新しいメソッドの習作あるいは目覚めたシステム  
の黎明 その二



## II

では、続きである。

ガウディが出てくる戯曲はセットが大事になるという、何かの破片を割って、ぺたぺた貼る。そういうセットを作り、壁に築く。マンガ家ならスクリーントーンの切れ端を集めたような、今までも戯曲で作った舞台のゴミになってしまう材料の余り、「それ『天地創造デザイン部』と元ネタが同じ、ウエケンのマンガじゃん」という事である。

担架でガウディが運ばれてくるとか、担架の布が路上生活者の衣服を縫い合わせたりアリズムだと路上生活者から中古販売で買うか、物々交換。

影の中に照明をあてて、グウェル公園のトカゲみたいなのが浮かび上がり、影が動けば、トカゲも動く。トカゲの形をした聖霊はガウディから離れる。聖家族否定で、外尾さんは石にノミを打ちながら「こんなのガウディじゃない」と涙する。

サグラダ・ファミリアはその聖霊が宿って生まれる。

そんなセットは人間の尺度も影響する、人間は万物の尺度である、人間本位説の言葉である。

SFでこのような考えがあるのは、人間の身体サイズが小さいと分子間力が働く。小さな人間が持ちやすいおちょこでは、気圧も作用するが、分子間力で水が落ちてこない。現在のサイズが適量、適性、それが得てして本位説の原点になる。

だからル・コルビュジェのモデュロールか、丹下モデュロールか、である。

丹下さんはまあ言うてはナンだけど、小柄だったから大きな建築を目指し、千利休は大柄であった事は近年発見された甲冑でわかり、その人物が狭い待庵を考案であり、何かサイズの反転があるようである。

政治的には、巨体の自分が狭い空間にいて、下克上して成りあがった戦国武将に気圧されないようにするためだろう。あんな小さな場所に刀も持たないで、当時巨人と言われかねない身長で、仏頂面のおっさんに会ったら、威圧感十分で気後れする。マンガ『へうげもの』の千利休の顔が（小さなコマ割で待庵に入り、ページをめくると）見開き二頁どアップを想像する。

セルフプロデュース、あるいは自己演出があると、そこがセットの効用であろう。自分の背が高いから天井が高いとか、用的な所もある。

近代的な設備で実演されるのが、近代演劇となるか、そこにも懐疑の目が向けられる。

押井守さんが『スカイクロワ』でキルドレの所在無さを表現するため、セットの縮尺サイズを大きくしたように、逆にサイズを小さくするのも、ありである。待庵の逆。

人間に合わせるか、セットに合わせるか、舞台演劇永遠の課題である。

待庵は、リアの奥深くに設置して密談するという、体格のいい演者と秀吉的小柄な丹

下さんを選べなかった際に使われる。これもまた、鴻上さんの本の話だけど、俳優事務所に背が高い人、背が低い人が所属していない。

すると俳優で演出が限られてしまう。

黒澤明が大玉を使って撮るのと同じ。オペラグラスで観てもらえば、いいのでは？ 『家族ゲーム』の車での会話、密談というか、茶室としての機能で、謀議を図ることの場としているようだ。クロサワだったら圧縮望遠レンズで抜く…後に『椿三十郎』を森田芳光がリメイクするって、正しいのかもしれない。

由紀さおりが伊丹さんに連れて行かれるのは、何か、ありそうな予感を出している。この頃の由紀さおりは、妙に色っぽく車で何かするのでは？ と期待してしまう。私ならつい窓が曇っている画を作ってしまう。(セリフでは若い頃のそういう至らなさが夫婦を生み出しているとある)

一戦が終わり賢人イタミとなっていないが、エディプス悲劇を避ける内容を語る。原作にあるのか、森田演出なのか。原作小説や戯曲に書かれていない事が、映像や舞台の上で視覚的に表すのが、演出だから。

丹下さんの場合、小さな日本人でも、大きな建物が作れるという思想だったのか、高度経済成長のモニュメントとしての大建築を作っている。都市計画・東京1964？ だっけ？ これに影響されて、『俯瞰の男』で大学を中心とした放射線上の学園都市を設計している人物を出した。

それでたまたま東京に行った時に、都庁前で霧が出ていて、まじりっけなしのナチュラルなドリリー・スコットの映画みたいになっていた。サーの映画テーマパークに来た。

プレステーション・シリーズで再現したら、ポリゴン数がいくつか、くだらない事を考えてしまった。

無茶な接続をすると、鼓一つで霧がむせぶとか、能舞台で立つ、ということは伝統演劇となる。そのための身体を習練で身に着けないといけない。

同じネタか、「風姿花伝」の芸は七歳から型・伝統偏重メソッドの早期教育を受ける。荻村伊知郎の「反応速度を鍛えるには早期教育」のような、事だろうか。

批判精神を持つ前に、芸を仕込んでしまおう、「幼児洗礼をするのか」の、指摘の前に、身体を伝統芸能に従わせる、成長過程で芸をしみこませる。後付かもしれない。

批判精神については、大学くらいで演劇を始めると、大スタにゃにゃスキーに反発して、いろいろな象徴主義系統の舞台演劇にのめり込む若者たちを見るにつけ、幼児洗礼が正しい気がする。Sシステムが伝統主義になっている。誕生から百年経てば、そうなるだろう。

大きな茶室ボックスシステムか、巨大ビルの一ユニットがボックスシステムになるのか、還元すればボックスシステムは強固、いくらでも応用が利く。若村真由美が老いを表現した「チルドレン」で、ボックスシステムがズレている。セットがフロントにせり出してはじまり、最後はリアに引いて終わる。

それなら、奈落にボックスを仕込んだらどうなるか？ 大鏡を天井に仕込み、奈落の芝居を反射して見えるようにする。これは二階席、三階席の方がかえって見やすい。

できれば『ユリクマ嵐』を高取英方式で演出したい。少女たちと剣戟とタイムスリップ、寺山門下で聖ミカエル学園なモノに再現は、そのままは難しいけど、ディスカッション

ンがバトル、議論バトルが剣戟をしているような見応え（聴き応え）を『金融腐食列島呪縛』みたいにやる。（その成功例が『半沢直樹』で）

赤字になると思うけど、すっぽんから暖炉の煙が出て、これぐらいしないと、回転寿司のラインを客席までに対抗できない。すっぽんを次使うとき、冷却しないと。

観客にアプリをスマホに落としてもらって、大音響と照明の輝き、眩暈値多めの排除の義（裏方は冷却の義）をして、お客さんも共犯で小倉唯を食べてしまう。スケジュールが合わないと思うから、声だけ出演だと思うが。

ちゃんと、歌舞伎の様式どおり、すっぽんから出てくる人物は、クマが化けているとか、最後はクマになったから、すっぽんを通ってくる・・・最後まで書いてどうする？ エンディングにテレビアニメと同じ曲（オープニングの方）を流せば、チケット代を払った満足度は得られる。

まあ、このようにボックスシステムの改良、それがシステムと連動するのか？ というのは実は微妙。

演出と舞台装置は予算の兼ね合いだったりする。

蜷川さんへの悪口は、予算があって成り立つ部分が多い。

東宝の演劇公演、古くは映画スターが舞台に、今でもテレビスターが舞台に出る事で観客動員が多く、必然的に大箱でかけること前提で、もちろん予算出費も多い。

花道のような通路を使うのも、第四の壁の概念を壊しているというより、日本の伝統にしたがった結果であるのは、定説的になっている。

劇的なことは花道で起こる、起す。

受難劇を私が演出すると、不衛生な通路でキスする。すっぽんからキリストが出てくることで、何かが化けている。聖霊が化けて「子」となっている。サランラップをその場で敷いて、小道具の話になる。

そういうセット問題であるが、ひとつひとつ個別にバルコニーシーンが二回ある、ロミジュリでボーダーが発達したと思われ、高二重.....という言葉、ダブルボーダーか？ 何か、そういうものがあるらしい。

「シェイクスピアロマン」でも縄梯子を.....これはいいか。（梯子を上った先でイベントは、あそこの会社で作るので「お兄様 いたいの いたいのお」）

『サザエさん旅あるき』を少しばかり読むと、メアリー・スチュアートの城に訪れて、例の逢引中にメアリー父と出くわして、そのシーンをガイドさんや補修工事してる人が一部始終を演じてくれる。ガイドさん、義手なのは偶然。銀の小手をしていた。（そういえばクイーンメアリーとメアリー・スチュアートはちょっとややこしいと思っていたら、自分がはまっていた）

それがロミオとジュリエットの元ネタかも、そのまんま逢引がバレると、ロミオが殺されてしまう。当時の人たちは、このバルコニーシーンを擬えていると、皆知っていた。だから、悲劇に終わらないといけない。まだエリザベスの治世であるから、政敵を擬えた人物は、死なないとダメだろう。逆に「ペリクリーズ」でセイーサ（ターイサ）が蘇ったのはジェームズ一世になって血統的にメアリー・スチュアートが蘇った暗喩か？ とも、思える。シェイクスピア研究をしていたら、必ず突き当たる。

話の内容がやばくて、仮死の薬はメンタリズムでキリストがあらかじめ仕込んで、

「ほーら蘇った」と、やってないか？ ロレンス神父がジュリエットに渡す薬が、その秘伝の薬では？

上島竜平のキスのギャグをする前に、「唇を（手の甲で）拭った」とビートたけしに言われたように、きつけ薬塗った唇で眠っている人（仮死者）にチューして、起してただけでは？ シェイクスピアの時代で、バレてた、という事？ 十六世紀末にもう、新約聖書のトリックを受難劇のステージトリックをするからわかった？

これ、『あり思』とかぶっちゃう、ハル王子は女の子にキスされると、状態異常が治るとか、書いちゃダメだろっと。（ただ「リア王」を読むと霊薬というか、なんか射精しそうな記述がある）

同じように、その戯曲、書いちゃダメだろっと。

ある観客層からは、「男同士でキスは無いんですか？」と。上島竜平としなさいとしか、言えない。

「これが私の 2.5 次元です」

それでポケモンのバトル画面は、フロントとリアの奥行き、レフトウイングとライトウイングの下手上手を、用語では下手の主人公をなめて、対決する上手のポケモンが奥に位置する配置図である。なんで左右が決まったのか、リアとフロントはそのままで逆ではダメだったのか？ 答えは『映像の原則』に書いてあるようなものだから、別にいいか、と思っていたけど、何か書かないといけない気がする。

ターン制の交互に応酬があるリアとフロントの螺旋状のスパイラルに展開。

これは、『あり思』第四巻のネタの先出し、フライングになるか、一部のシミュレーション R P G は右から左へ、がある。ある本（『アニメ制作者たちの方法』）でも、その点を富野監督の『映像の原則』を引いて語られていて、実はポケモンの海外の成功は、この左から右のスパイラル構造にあるのかもしれない。

富野監督の下手上手感覚は海外だと『機動戦士ガンダム』が、一部のキャメロンやスピルバーグに評価はされているけど、浸透していなかったが、ともかく海外向け輸出工芸品を目指すなら、右から左じゃなく「左から右を目指せ」になる。

理屈はわからないけど。

計算方法がわからないのに、解答が出ている状態で、話戻そう。

リアの演出は、この間 BS で放送された「セールスマンの死」でも、脳裏にその人物がよぎると、その人がリアをよぎるという精神的にかなり危ない、そういう事を予感させる。

ゲームでは敵視点の『バトルロード』で先鞭だったはず。これを舞台でやると、裁判のシーンを観客が傍聴席で見ているのを、『野田版鼠小僧』なら、今の勘九郎で三太をやらせて、お白州を斜めで平面的に見せる。お奉行様の後頭部が見える角度で、うっかりすべると落ちちゃって、セリフにあるギャグを言って、ウケなかった時もワザとすべって「すべりましたなあ」「三太（サンタ）ですから、そりに乗っているんです」と、「戯曲に書かれていないことをすると野田さんに叱られますよ」。

「ヴァリエント・オブ・ゼルダ」でやる（一生できないけど）、二階に行きたいけど行けないワンフロアに、道具を使って外からゼルダ姫の光明が届くと、壁を平面化させて見下ろしマップになる。

螺旋階段は『大江戸視覚革命』に拠れば、作るのが難しかったとされる。二重螺旋階段の工法が海外から伝わるのを、待たないといけないのだ。この、近代機械以前のクラクリ装置までが、近世劇の舞台のセットに使われているということだろう。

レギュラーであるらもさんの『しりとりえっせい』でも、いろいろ調べたネタを出している。「どうせ、近世時代の古い産物でしょ」と、なめていると良くない。用語のなめるではない。

擬洋風の西洋館が作られたのは、こうして近世時代に徐々に伝わって行って、再現できるようになる、あらかじめ習作となるような事が、舞台や何かで試しに作られているようだ。

先行技術が少しずつ入ってきてても、普請道楽する人がいないと、継続的な技術の習練が無い。

現実には、近代演劇の手法で江戸時代の劇をする。人力手動が機械電動になっている以上、近世劇の中身は実は「現代技術劇」になる。

その工法的なことが、形に表れる。バウハウスの思想というか。

セットに身体を合わせるか、セットを俳優達に合わせるか、という基本的にずっとあった問題が、近代か伝統かの縦軸も加わって、能舞台にあわせると、型・伝統偏重メソッドになる。伝統だから、型を繰り返して鍛錬する。

第四の壁を無視するというより、そもそも概念が無い花道は橋がかりから来ていると思われる（と皆言う）が、千両役者を近くで見たいという、観客の要求があって、成立する。

つまり俳優に舞台を合わせたのではなく、客に合わせたとも、言える。

今の舞台では、あまりやらない、下手の奥の方に役者の背中が見れる席が、円形劇場的にある。平成中村座あたりで、再現していたかどうか。宙吊りをやって三階席二階席のお客さんに愛想をふるまっていた勘三郎は（テレビで）見た事がある。これはお客さんがお金を払った甲斐がある。

近代演劇黎明期にシェイクスピアを演じるのは、日本国内の演劇で言えば時代ものをしてるに過ぎないが、間違いが無かったと思われる。

まずシェイクスピア劇をやらないと、近代劇ができなかった。近代演劇にも通じる演劇技法的な事を網羅している。(バルコニーシーケンス、スプリットフォーカス、傍白)

キャッチボールが野球の基礎みたいな、ドリブルやリフティングがきちんとサッカー技術の土台となるような、ともかく踏み台にして、すぐ近代劇に行くと、やはりロシア人がわからないと、役者が思っていた。

エリートは直接留学しているし、インテリはその前に書籍で知っているが、ほとんどの演者はわからない。二葉亭みたいなロシア語に精通していれば、ロシア演劇がわかるが、当時、ほとんどの人はわからない。

しかし、古代ギリシャがあって、帝政ローマ時代、中世ヨーロッパ、英国のバトルロイヤルがあって、それは源平合戦から南北朝、室町時代があり、戦国時代から徳川幕藩体制と侍の形が変わっていく時代の変遷と擬えられる部分もある。国内でも、時代劇で江戸時代を知って、幕末・明治・大正を経ないと、なんでああいう劇になるか、わからない。

すぐに近代化できるわけもなく、ヨーロッパ近世を虚構内でも体感しなくてははいけな

かったと思われる。

「同じキリスト教でしょっ」と東方正教会系とカソリック系の違い、さらに旧教・新教の差は江戸っ子に毛の生えた明治人にはわからないのである。私も免罪符と戒札（この漢字が正しいのかわからない）は同じモノなんだろうけど、実はよくわからない。

新教が近代演劇を生み出したのは、プロ倫みたいなお話になるか、こうした近代演劇の「古典」とたとえられる戯曲も、現代では再構築しなおされている。ウォールクライミングするように、バルコニーをよじのぼるロミオは、そうした登攀ができる若さの演出を20世紀になって、している。

若くエネルギーだからこそできる。鴻上さんの本にある、「若いって素晴らしい」の解釈に寄った造りという事だろう。

何度も書いている気がする、多面的な演出か、平面的演出、2.5次元はアニメとマンガの平面表現分野を舞台化した（2次元と3次元の間）だけではなく、テーマも平面に寄せた2.5次元にしている。できるだけ多面性を廃して、テーマを平面化して主要な観客である女性が求めるモノに平たく打ち直す。

興行シリーズが続いたなら、多面的に、でも主人公の純真さは失われないと、「若いとは愚かである」はちょっと味付けに塗られる、それも肯定的に甘く拵えないと、口に合わない。客に合わせるとは、こういうことか。（ジョブズ的というか、愚かであるが救いがあるとしないと）

形は、神の形と人間の形は同じなのか。だから、どこかで形・肉体メソッドは宗教劇というか、

神人同形論というアントロポロジー、文化人類学の綴りと同じモノを書くが形・肉体偏重メソッドはここに突き当たる。

人間の身体と神との違いはなんなのか、形は同じなのか、むしろ神人異形論になるのか、神人同形論的セットを作るのか。

SF的四次元・高次元論だと神が立体的な影（コピー）を施して、それが人間に受肉された「神のコピー」として動いている「影」が人間を平面的に真似て動くように、人も「神のコピー」にすぎないのか。

最近のSFでは「影」ではなく、エネルギーになるが、食物エネルギー（カロリー）にしろ、運動エネルギーにしろ、肉体はそれを求めるから、違う意味でエネルギーに動かされている「影」になっているのだろう。だから形・肉体メソッドは宗教劇の引力（時間も作用するなら重力）に常に引かれている。演劇論の美学の一つとして、語られる。

（『ジョジョの奇妙な冒険』の作者はミッションスクールに通っていたといわれ、スタンドとは立体的な影であり、だから第五部のレクイエムがどうのこうの）

野田さんの空飛び佐助のセリフ、「人間は空を飛ぶ為に四足歩行から二足歩行に進化した」というなら、どこへ向って飛翔するのか？

それは神の下だろう。アントロポロジーに向って飛翔するのが野田演劇だ。その意味でイカロス劇、ギリシャ古典が肉体にあらかじめセット、同じ言葉でセットとセットを取り違える、言語ゲーム的なモノの内蔵が内臓に刻まれている。

四足の聖霊トカゲが宿り、二足歩行の人になったのが、野田秀樹だ。（『マッドマックス 怒りのデスロード』で冒頭にマックスがトカゲ食ってるのは受難劇というか、つま

りトカゲは聖霊だった…映画の話題が主旨じゃないからなあ)

第三世代の演劇は、形・肉体をセットしている。

数え方は違うが、第一の古典芸能から歌舞伎で伝統、型をセットし、第二の心・内面は日本とは違う人物を演じる内面のセット、そして第三世代は肉体をセットして、顕微鏡で拡大したら、その中にはどうも伝統がセットされている。

それがないと、メソッドからシステムになりにくい。

いつもの持論、西尾維新は野田を越えられないと、いじめじゃなくて、そうした評価を下すのは、こうして野田にはあるけど、西尾にはないものがある。

肉体が舞台装置になり、肉体からセットが染み出す。

つかさんから第三世代ぐらいまで、大きな舞台装置をせず、映画の『蒲田行進曲』でちゃんと舞台装置として階段から落ちるのはあるけど、大きめの小道具？ 小さな大道具の車が無い。車に乗るが車は出てこず、ハンドルの小道具ぐらいで、パントマイム芸なのか、その場で空気椅子して車に乗っているかのような、

「金ちゃん、スピード出しすぎだよ！」「免許持ってんの？」と、ここで有名な「スターには免許はいらねえんだ」と名セリフ！

松方弘樹みたいなスターは何をやってもよかったのである。汚名も有名に回収される。勝新太郎かよ。

肉体からセットが滲み出すとは、俳優たちの真に迫る演技で、そこにセットがあるから、セット（舞台美術）がいらない。

意外に象徴主義系は古典復古的である。

先に触れた人間本位説と人本主義というヒューマニズムというより、フォービズムとか、野獣派などが先史時代の芸術みたいな、神学論争に突入しそうなので、セットに話を戻そうと、思う。

近代建築、その工法で作られた舞台で演じられる戯曲は近代演劇となる。

適切な分類法であるかは、ともかく演劇を通じて人間を近代化するのが、近代演劇ではない。近代化して「よかったね」が喜劇で、近代化できないが悲劇であるという、主人公が死ねば悲劇、生き残れば喜劇の分類法じゃない。

伝統を近代に上書きするのが近代演劇なのか、人のモダニライゼーション問題、演劇トレーニングをする。近代人を装う、近代人に演技させる。

バウハウスの建築様式で近代演劇になるとか、それで身体を近代化できるのか、打ちっぱなしコンクリートの工法が先に立っているだけで、取り残されてはいないか？

今は、日本人の食生活は欧米化甚だしく、体も欧米人にひけをとらないのである。昭和生まれと平成生まれはボンスケールが違う事に意識を向けないといけない。

だから歩行が必要になる。ミットを蹴った門下生にビンタするような佐山である。

間違った例えをしている。外国人にもしているからね。モスクワ芸術座のSシステムの総本山で鍛えた俳優達も、鈴木メソッドで鍛えて「リア王」を演じる。

小山内薫伝説、これについては、どこかで、何かしたい。

今までは人が上に立つと、壊れてしまう骨組みが、やがてカーボン素材で可能になる。セロテープで…まあ、化学を知ってる人しか、このギャグがわからないので、割愛するがジャンボジェットに使うようなカーボンフレームの骨組み舞台で役者が立てると、現

代劇になる。

反対に石を置いてギリシャ悲劇によった造りとか、でもそういうセット作ったら、目くらまし的にプロジェクションマッピング（安上がりなデウス・エクス・マキナ）をしてしまう。

ダルビッシュ有は、体格に恵まれているとは、本人は否定する。（メジャーリーグクラスだとザラな体格という事では？）

筋量を増やし、栄養学に基づいた栄養補給、ちょうど柵橋弘至のような事をして、成績をあげてさえいれば、スポーツマスコミは褒め散らかす。

桑田と相対評価すると、ダルビッシュは体格に恵まれていたと言える。

『桑田のピッチャーズバイブル』に書かれている、登板の翌日にマシンによる筋肉トレーニングで疲れを抜き、筋量を維持するが、乳酸をわざと出す。どうも乳酸の酸と疲労物質を化合させて体外に出している。

いわゆる乳酸は疲れをとる物質説である。（栄養学的には糖をエネルギーに変える時に乳酸が作用しているらしい）

レッドブルとかに入っているアルギニン酸とかは、そうした酸化合物は乳酸の材料になっていて、疲労物質と化合するから燃焼まではいかないが温度が上がるから、運動後身体が熱くなる、と、理科の知識だけでだいたいわかりそうである。ホメオスタシスのように、恒温動物の温度調整機能、汗をかくも、毛穴を閉じるまで、知らなくてもわかった事ではないか。

「まごはやさしい」の食事、栄養学的に正しい、バランス栄養を摂る。高タンパクで低糖質の筋肉トレーニング。マヨネーズにヨーグルトを混ぜてサラダにかける。カロリーが高いからだ。

これを190センチほどのボーンフレイムのピッチャーがやるとどうなるという、実践がダルビッシュを作った。（有くんはプロフィールを見ると196センチ）

これはマスメディアに出る者のツネだが、成績がいいと、もてはやされる。桑田も防御率のタイトルをとった時はもてはやされた。しかし、低迷期には歯牙にもかけない。それどころか、好調期にしていたことが原因だと、成績が悪いと、同じ事を悪く言う。

『ビジネス書は何故間違えるのか』で取り沙汰されているが、こうしたハロー効果を取り除くのが、大変なのだ。

21世紀の日本人のボーンスケール・体格に合ったセット、繰り返しになるが、このあたりに新しいシステム、再起動のメソッドは、ブレイントレーニングから、肉体の内臓を探り、栄養学に基づいた肉体作りをする。

まずは早期教育の型・伝統偏重メソッドとの軋轢、コンフリクトとして起きる。

まずは内面からの新劇の理論、つまり心・精神偏重メソッドのトレーニングとどう兼ねあうのか、まずは肉体からの食物と筋力アップのトレーニングでは、先が思いやられるのでは？

ともかくアプローチが三方向あって、それを20世紀にやりつくしている。これからは、脳科学によるアプローチをやっていかないと、いい俳優は作れないのか、新しい演劇が必要で求められるかはわかららないが、そういうモノができない。新しい演劇が必要でないなら、伝統に帰ればいい。

基本的なこと、今までもしていたように、二時間の舞台をこなすために、毎日2キロぐらい走る。マチネーとソワレの二回公演も、やる時はやる。

吉田鋼太郎は一日二回も「シスターズ」をやれるし、「シラノ・ド・ベルジュラック」で百人切りする。演劇的体力が並と違う。スーパー快男児を地で行く。

「鋼太郎 走る 鋼太郎 恋をする

鋼太郎 詩を吟じる 鋼太郎 飛ぶ」

「鋼太郎 嘆く」は無いのか。(作ろう)

現代食の日本食は日本家屋の舞台では、適さない身体になる。子供の頃から、高栄養で体格も大きく育ち、身長・体重の平均値も上がった。今度は贅沢病で肥満になりやすくなった。

西洋人のような体格に成長してしまうと、丹下さんのような小柄な日本人のための住宅が、手狭になってしまう。丹下モデュロールからル・コルビュジェのモデュロールになる。あるいは丹下モデュロールのセットを組んで、現代の日本人のボーンスケールとミスマッチ、そこで千利休的な体格で待庵であると、簡単に戻ることはできない。

堂々巡りになっているようで、少しずつ螺旋状に上がっている。モデュロールの説明を一からする場じゃない。

そしてまた、繰り返しになるか、身体は大きくなったが、肉体習練が足りない。

そこで歩行をさせるのが、私の回答だけど、評価はされない。労働賃金を生み出せなかった以上、結論は出ている。ハロー効果とはまったく逆なのだ。(逆に実態が露呈する)

富野監督の動きが描けないと、蜷川も若い俳優が動きができないと、共通する同じ幸の字が赤いところである。(まるで「蜷川幸雄と富野良幸」の宣伝のようだが、宣伝です)

それも産まれて先天的にあるというより、後天的に得る経験が足りないとされる。それを補えるのがメソッドで、歩行がコシなら殺陣はヒザと、それをできるようになるトレーニングプランをプランナーだから作らないと。

こういう事をちゃんとやろうとすると、ハリさんとか福本豊とか必ず、文句を言う。おそらく演劇の世界でも同じだろう。

さらに伝統的役柄、海外の異国の人物も演じられるようにするのがシステムと、ここまで書いて、やっとやる事がわかったのである。発声練習ひとつとっても、壁際で背筋を伸ばして数を数える。これが日本語で「1、2、3、4」が正しいのか、英語の「ワン・ツー」が正しいのか、ロシア語ならほとんどの発音をカバーできる、と思われる。

「シルエットアクター」がこんな事で完成するのか、いつまでたっても完成しないのではないか。

それはわからないが、セットに身体を合わせる問題に、深く関連する気がする。

役に身体を合わせるのか、身体に合う役を見つけるのか、身体に合っているとわかって、役を押し付けられるのも、俳優は応えられるように、トレーニングしなくてはいけない。

それは今まで通りでいいのか、身体が大きくなったのだから、Sシステムでいいのか、だけど基礎訓練が必要になる。

『スラムダンク』の話題を出すと、スラハラになるけど、魚住という体格に恵まれた選手がいて、基礎練習に耐えかねる場面がある。そこでバスケット部の監督が言う名セリフ！  
「オレはお前を大きくすることはできない」である。

だから、肉体習練を授ける。当時まだ、クォーター制じゃない前半後半の40分間走りきれる体力を持たないといけない。

まあ、全てゴトチヒの創作である可能性があるのですが、本物の『スラムダンク』を読んで、「ゴトチヒの嘘つき！」と、罵る事も読者にはできる。「オレはお前を大きくできない」ってゴトチヒの考えたセリフじゃないか！ 『スラムダンク』のイメージキャピタルを横取り40万する演出家がやりそうなこと、『スラムダンク』が面白いじゃなくゴトチヒが面白い。(こうすれば皆本を読んでもくれるのではないかな？ だいたいドカベンフォロワーは酷い目に合わされる。体罰容認していた事を必殺仕事人的に溜飲の下がる報復されてめでたしめでたし第二次東京五輪)

口直しにスタジオジブリの身体に関するいい話で引きたくないが、黒田硫黄のところに連名でファンレターが届く。記憶違いでなければその返信が社内報「熱風」でも、掲載された。

『茄子』の自転車レースの回を読んで、皆感化されたのだ。

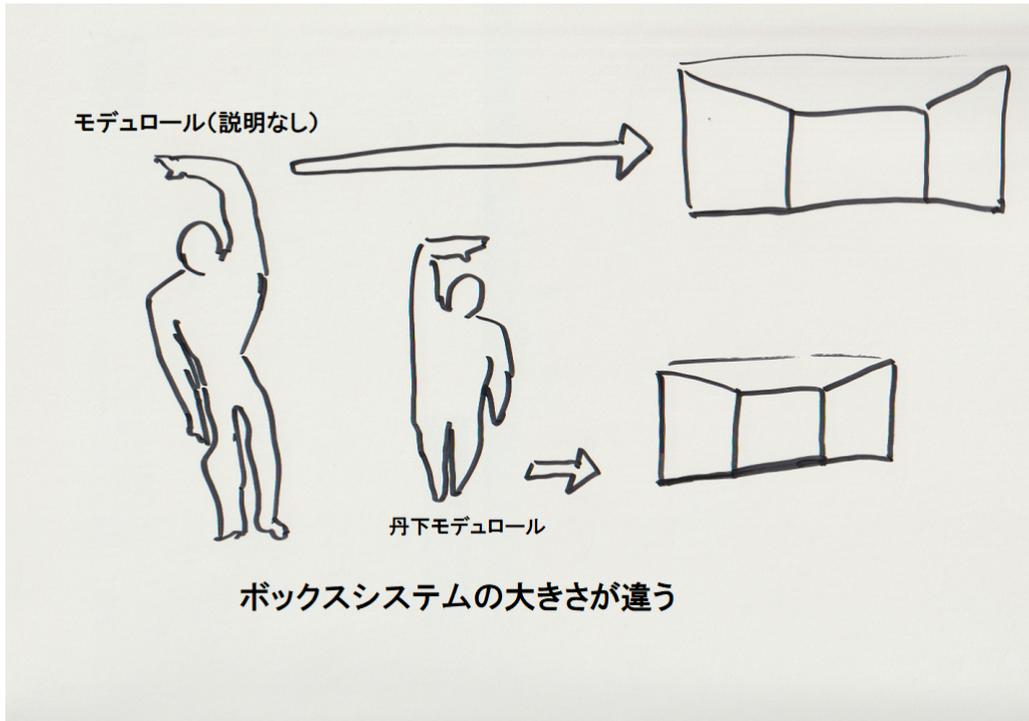
具体的には社内に自転車に乗る部を作り、年に一度か二度、ツーリングするみたいに長距離を走るという事で、そういうことをしないと、運動の作画をうまく描けない。そんなこんなで『茄子』にとっても感情移入して、原作者に迷惑メールを送りつけたらしい。そして後に高坂希太郎監督が『茄子』のマンガをアニメ映画化するという、だんだん後半に入ってきて、メンドくさくなってきて飽きて、デマゴギーも入ったフェイクニュース的な文章を書いているが、テレビ番組ドキュメンタリーの好感を持って伝えるパッケージとはいえ、そんなことを出来ていたジブリの輝かしい足跡が懐かしくも哀しい。

(苺の柄がある布着れを広げて) 大人になったら、ジブリを卒業するけど。

(布着れを縮めたり広げたり)「か〜でいなる か〜でいなる」

## 幕間 図画説明二





gazou02.jpg



新しいメソッドの習作あるいは目覚めたシステム  
の黎明 その三



### III

(布切れを)「か〜でいなる か〜でいなる」

小道具を使ったブリッジもうまく決まったところで、今までのおさらい、である。

つまり、どうやって新しいシステム、少なくともメソッドを作るか、そういう小難しいことをする。

実際に人を集めてやる場合、劇団の演技内容とか、話し合っただけのゼミ方式になると思われる。みんなの持ち寄った演劇の断片をやってみて合わせる。

対角線のシーケンスをしたことがあるなら、「とりあえず、やってみよう」と。平田オリザのワークショップを受けていたら「君だけ平田オリザリアリズムで他は野田さんみたいにはしゃごう」という、演出プランを出したりするんだらうなあ、と思う。

そうすると、偏りはあっても平均的な演劇になる。

そうじゃなくて、メソッド or システムを俳優訓練工場というか、ラボなのか脳科学勉強会というか、マッドサイエンティストの人体実験場なのか、クレージー五島のアクターズ・トレーニングセンター。

すると二つ劇団があるといい。

芸術系な輸出工芸品の海外上演はこっち、商業的大衆演劇国内ニーズ向けに合わせているのはそっちと、俳優をコンバートしたり、わかりやすく「赤鬼 レッドデーモン」をやれば、どちらかの俳優を赤鬼がやってくるようにトレードして、別働の劇団を「寒村」に見立ててという、MCUのフェーズIみたいな、ことをやりたくなる。

野田さんの「赤鬼」って、沙翁浪漫を通るとキャリバンもの、なんだよね。これは商業演劇の側の俳優がキャリバンで、小劇場の俳優たちの村に来ちゃった。逆も然り、しかりって読めない？

二つゲームソフト、同時に作れると、いいのである。

「ああこれが、横井さんの言っている一つのアイデアで複数のプロブレムが解決するか」

スケジュール的に無理。

時間的に。

鴻上さんが、昼自分の芝居の稽古に出て、夜ゲーム開発会社でディレクターをやって、めちゃくちゃ忙しい事をやっていた。

若い頃でもちょっとできない。

なんとかできるのが、宮本茂さんのアクションゲームをメインに作りつつ、別ラインでレースゲームを作る。蛭川さんがシルバー演劇部隊を作るような、モノだろうか。

システムとメソッドに分かれている、精神や肉体、古典演劇に依拠するモノは伝統で、大スタにゃにゃスキーも、伝統化しつつある。俳優さんはまず、アニマルエクササイズが重要で古典・伝統偏重メソッドでも、同じところがある。

次にセット、身体とセットを統一させるにはモデュールとか、そういう肉体と物理的にリンクするセットを作ろう。あるいはそのセットに合わせたシステムを俳優に、反対に身体に合わせたメソッド。

それらトレーニングを必要、いずれ話していく。

仕入れたネタ、置き道具・持ち道具で今度はセットが大道具（置き道具）だとしたら、持ち道具の小道具は如何にマグガフィンになるか、と言う話である。

セリフじゃない？ と言われると、う～ん・・・。「デウス・エクス・マキナ論」はたまたま同じ時期に蜷川さんも富野監督も同じカタストロフィ劇をやっているの、狙って「よーしこれからいっちょカタストロフィ劇をやってやるぞ」といきまいてやったら、絶対失敗する。

つまりSシステムを踏まえた上で、肉体か精神、あるいは伝統の三位一体をそろえた新システム、その内のどれかに偏ってもいいから新しいメソッドを作ろう。

自分の名前を冠したゴトチヒシステム、それが「シルエットアクター」の副産物、いんや同時に作っておかないと、その先の失敗が見こされる。

それで置き道具やったら、次はセリフだろう。傍白をしなくなったのが、近代演劇とか、科白の白は「何か言う事」を指していて、言葉はかつて透明だった、ペイントソフトの白は透明指定がデフォルト、PNGで透明そのものを指定して保存。（予定であったが、それはわからない）

わからない人はどうすんだ。「ガンダムのネタでやる」から、完成したら、シークレットに入る。（予定だった）

セリフをこの程度にして、システムは小道具に関わっている。

メソッドだけでも、ある映画でポール・ニューマンが撮影とはいえ殺人に使われた小道具を、見れなかったという。反射的に眼を背けてしまう。それはSシステム、メソッド演技でマグガフィン、芝居の凶器を本物に思う。訓練がよくなされている。

それがシステムやメソッドを用いたことによって小道具がマグガフィン化している。

精神メソッドが正しく「教育」されていれば、「凶器に自分を可愛がってくれた叔母さんの血が付いていた」と、本当に思ってしまう。

「見るのもイヤだ」となれば、トレーニングの成果が出ている。

脳科学的にも、なにやらあるらしい。

この辺りに、俳優は役の人生を生きる、がある。

拾ってきたネタは実は舞台の上に無い、マグガフィンもある。

ある俳優が、自分の子供の骨壺を舞台袖で置いて、名シーンに入る前に、その骨壺を眺めたり、触ったりする。勝新太郎の『俺・勝新太郎』では泣くという芝居の時には、父や母が死んだら、と思ひ浮かべる。この思ひ浮かべを物質化した物が骨壺だ。

ここからヨリックは何であるか、私の出した答えもわかって。

とはいっても、ほとんどの小道具はマグガフィンにならず、ただ劇の中で通過するアイテムに過ぎない。

映画などのマイクロフィルムやUSBメモリと言った、情報媒体は、シナリオ内の情報価値が重要になる。役にとって重要、男子中学生たちであれば、見た事も無い映像（もちろんHなモノ）が入っていれば、スパイにとって他国に渡っちゃいけないくらいの機密情報が入っていると、変わらない。

シナリオで役とマクガフィン二つ同時に設定され、情報媒体は何かとスパイなどの役が設定されて、忍びなら密書、マクガフィンが形を変える。

奪い合いで格闘戦になる時は、情報媒体が小さいとか、柳生封廻状のような密書が巻物なら盾にする。殺陣ならぬ盾。ファイトコリオグラファーの腕の見せ所である。

古くは狂言の扇を知らない太郎冠者、殿様に扇を買って来いと言われて、ジミー大西みたいな事をやりだす。逆にこれは役が扇すら知らない物知らずの人物、すると扇がマクガフィンになる。モノボケだけど。

同じことか、役の設定に傾いているか、小道具が希少か何かでマクガフィンとしての先天的なように、持ち物そのものが特殊であって、なんというか演出といえるか、役ではなく、その俳優にとって特別な持ち物である。

それと、こんな事わざわざ言う事もないけど、小道具さんが作れないモノを求めちゃいけない。

例をあげると、何がいいだろう？

適切な物件がある。

河原雅彦が主宰していたハイレグ・ジーザスの舞台で人糞らしきものをステージに陳列して猥褻物陳列とか、そういう容疑で本物の警察官がやってきて、それを見世物にするお騒がせ興行をしていた。

人糞をパテで象りして、その型から本物そっくりの人糞レプリカ（『ブループリオド』のエンディング曲名）を作ったとされる。ガラクタ宗の開祖、三田平凡寺みたいな、そんな事をしていたのである。そんな事をする事で、マクガフィンは生まれる。

似たような事を、子供の頃、人物の相関関係は伏せるが、ある人物（やはり子供）が泥を棒に丸めて焚き火で焼いて固めると、夕方にうんこに見える焼きうんこを作っていた事がある。

日が陰った夕焼け時に、焼いた泥を見ると、うんちくんにしか見えない。キャンプ番組とかで、マシュマロ焼く代わりに泥を焼いてみたら、どうだろう？ 絵力のある映像が、放送できないけど撮れる。（焼きうんこ製造マシーン）

で、保険の外交員らしき大人に見つかり「お前ら、何してんだ」と怒られて止められる。焚き火して危ないから。（ちゃんと消火用の水バケツを用意していなかったし）

そういう偶発的な遭遇と同じく警官は、

「これは人糞ではないのか？」

と、それに、

「いえマクガフィンです」

と、かみ合わない、このやりとりを客に見せる、ハプニング劇を見せていた。

大切な彼女であっても、「掃除した手で触らないで」と言ってしまう『TED』に置ける女の子の脱糞に焼きうんこの思い出とつながる。役とマクガフィンが繋がっているように、繋がる。

おばさんを殺した凶器は設定でなんとかなるが、泥で作った狂器、こんなもの小道具さんに作らせられない。作ってもらえない。『TED』では作ったようだ。ハリウッド映画だから。そこが邦画界との差。

人糞同形論。

ジーザズが王権を神授して、レガリアが人糞なんだろうか？ 聖糞という君主が騎士の顔に塗る（十字軍の映画で塗ってるアレ）とか、そんな事を書いている古い本があったり、神が油で聖別するみたいな、人糞が聖遺物化する。（中村ゆうじはオリーブオイルを一日一回飲むのも身体を聖別化する儀式だったのか？）

王様の糞香を付けるとか、中世の資料を見ると、あるものね。

ただの石や水を聖体に変える、ギリシャ神話からくるコルヌコピア、この説明はやめておこう。『精霊の守り人』で、ふつうのファンタジーRPGなら、絶対に使う宝剣、伝説の剣が作中使われない。名前もついているのに、レガリアとして奉納されているだけである。

レガリアと、マクガフィン是一致的な事もある。

少し、話がそれるがアニメ『精霊の守り人』の得物のデザインで、シリーズの続編で語られる血抜き溝を入れた刀、それを掬い取っている。

原作にある通り、溝の無い刀は実用に足らない。

そのため、刀に溝の意匠がなされる。それも技巧を凝らして、竜を入れたり、トーチミズムとか、そういうものが文化として刻印される。

普通の舞台演劇でそこまでできるか、あんまり凝り過ぎても、予算がかかるだけだったり、壊れた時にすぐに直せない。「シルエットアクター」はゲームだからタヌキが化けるとかで、なんとかできるけど、現実の舞台では壊れた時の事を考えないといけない。

イスパニアの名剣と、ロミジュリにあるみたいに、

「この世に二振りとなない名剣だ」

と、いうモノはまずいのである。リペアできないものはリカバリーできない。マチネーとソワレ、一日昼夜公演は絶対にスペアを作っておかないと、いけない。後醍醐天皇みたいに。（そんなレガリアがあつてたまるか！）

「おっちゃんはホラがすぎるからな」

ドン・キホーテやホラ吹き男爵と違い、全部真実。ただ、「ガンダムのブレードアンテナを折って鍛えたワザモノだ」というのは、嘘なのだが、クノッソス宮殿の奥には、別の世界に繋がっていて、いろいろと、世界観を壊す変なアイテムが手に入る。

フェティッシュは邦文が物品崇拜で、現在フェチとか、略称されると原義の意味と変わる。そのため使いにくい。

原義通りならハイヒールとか、脱いだパンストとかに、異常な性癖・物品に性的興奮を覚える。ところが胸フェチ、足フェチというのは、男性の異性愛者に限定すれば普通のこと。

「ら抜き殺意」みたいに、「女性の肉体じゃなくて、ちゃんと物品の事を言え」とシンカイ先生が怒るといふ、「レクシコグラファーロマン」でネタにする。

輸入されて変化したわけではなく、海外の人が書いたそういう本もある。

ただ、ちゃんとした俳優訓練を受ければ、自分自身がハイヒールやパンストが好きじゃ

なくても、役を演じる稽古の過程で、ハイヒールやパンストに異常執着が出る。訓練によって、フェティシズムを獲得できる。

先ほどのポール・ニューマンのように、物品崇拜的な反転で、凶器から逃れたい反応も出さなくてはならない。

これは抜くのも大切。

セリフを忘れないと新しいセリフを覚えないように、訓練で新しい物品崇拜に更新できる。というか稼業としてそれができないと、一般生活に暮らしていけないだろう。

実際は青年期に入るまでの体験で、〇〇フェチが決まるらしい。成人になると、新しく何かの物品にフェチになることは無いらしい。更新上書きが難しい。

実はマクガフィンの扱いに近い。芸のはじめは7歳がいいは、早期教育で早めに小道具への「フェチ」を与える、それが目的ではないか？

逆説的にはイップスを植えつけるのがトレーニングになるという事。ジストニアにさせるのである。

近年では、療法として治療に使うべきだろう。亡くなられた藤原啓治さんが、羽海野チカさんとの対談で、芝居はリハビリのためにやっている、語っているのがある。どういうパーソナルヒストリーがあるのか、わからないが、軽いPTSDをあえて与えて、大きなPTSDを快癒させる。

演劇トレーニングのワクチン療法。治ればいいけど、「傷口が広がる」かも。どう考えても、「副反応」がある。

さて、見えざるマクガフィンというのがある。

PTSDの恐怖を回避する、忌避するという症状がポール・ニューマンに出ている。

ストラスバーグさんは演技のトレーニング上、意図的に訓練で俳優にそれを植えている。俳優に植えていたのが、そういうキケンなモノである。『アクタージュ』の作者みたいなモノである。

こうしたPTSDを抜くのが、具体的に何がいいのか、例となるか、幻肢痛の治療に使われるミラーボックス、これがなかなか面白い題材で次にとっておく。ちょっとだけ説明すると、片手を入れて、失った片手の鏡像を見せると、幻肢痛が緩和される。八谷さんの視聴覚交換マシンを使ったらどうなるのか、試してみたい。

マッドサイエンティストだから。

こうして、幻肢痛を抜くみたいに抜かないと、新しいのが入っていかないだろう。

アクタージュ・スキャンダルを起こした作者はそういう事を知っていた。はず。松山洋？ 女優にそのPTSDを植える。

何か与える、「生殖細胞いる？」みたいな、性暴力が起きる理由がわかる。

『風雲児たち』のギャグ注にある、シティボーイズの「ひらめのムニエル」を「ひらめ・ひらめ・・・ひらめを無理に煮たの」を言うってしまうような事である。

同じネタをやったけど、ポメラニアンをゆっくりであれば言えるけど、早く言うと「ポメラにゃニャン」になるみたいな。スタニスラフスキーをロシア語の発音を覚えないと、スタにゃにゃスキーと言ってしまう。

イップス。

イップスは、道具を使う時に起こる事が多いというか、逆に考えると、役者がただの

小道具をマクガフィンに変えるのは、イップスになっているのではないか？

「タイタス・アンドロニカス」では、俳優が小道具になる。消え物になる。

テレビゲームなら、半透明から透明になって、その場に材料系アイテムが代わりに出現する。(具体的には SaGa の肉？)

「勇者ヨシヒコ」シリーズでやりそうなギャグである。DDTのヨシヒコではない。

「料理タイム」と思い出した読者は『美食戦隊薔薇野郎』の事を知っているから、同じく『アンダーカバーコップ』も知っているから、その話をすると、ひよこ近くでAボタンを押すと「グッド」「デリシャス」と言って、ひよこはどこかへ行ってしまい、ライフが回復する。アンジャッシュの音響ネタで「とてもかわいいなあ」と、被り物している人の声を出さなくちゃならない時に居島さんが誤って「とてもおいしそうだなあ」とボタンを押す。(タモーラも「グッド」「デリシャス」と言って)

児島だよ。米粒写経とアンジャッシュ、トレードして渡部さんと居島一平で何か復帰の助けになれば、いいかな？ 金銭トレードで児島くんを百円でアンジャッシュから買い取り、トリオになって、二人が漫才をしている横で立っているだけの人。ギャラは全て渡部さんの懐。

『ムーンウォーカー』の子供で体力回復は、シャレにならない。プレイヤーが操作するキャラクターがMJ。これ以上は私の口からはいえないが、大阪スポーツにて語られた事は、全て真実なのだろう。(資料『超クソゲー』)

受難劇だと、折り紙だとかで、息を吹いて、膨らませたのがパンとして現れる。

「パンだあ！」と、喜んで口元に持っていき、両手で隠して、「食べた」(今ならグルコースみたいな唾液で解ける素材でできた紙を口に含んで消す)という舞台演劇的約束事、こうして積み重なっていろいろできたのだろう。

マイケル・ジャクソンが子供と接触して、子供が消える『ムーンウォーカー』も同じ意味だろう。映画『ムーンウォーカー』はクライストムービーでMJはキリストそのもの、って「私の口からは言えない」と言っておいて、言っているじゃねえか。(舞台演劇で再現したいね)

そういう、傍白。

そういえば傍白という技法は、観客には聞こえるが「他の役には聞こえない」という、初めて劇を観る人はビックリするお約束事も生まれたのだろう。

小説でいえば、地の文。けっこうライトノベルをアニメ化した作品で地の文で語られた内話のコトバをセリフにして声優さんにしゃべってもらっている。(セリフで言わせている)

地の文の傍白化現象。「ぼうはっかげんしょう」と読むのか？)

どうでもいいことは、白(セリフ)から派生して、自白独白告白、白状と、漢文漢籍由来と思われる。(セリフは見えていない小道具説は今止めておこう)

その話の続きになるか、『孤独のグルメ』のテレビドラマは傍白劇だろう。舞台にすると、傍白が続くモノローグドラマ。このため、一時期、内面の言葉が雄弁なテレビドラマが量産された。

消え物のマクガフィンを五郎が食べるだけで、芝居が成り立つ。

ここで二択、コップにちゃんと水を注いで飲むか、空のコップを飲む演技。

コップも割れないプラスチック製のものにするか、「緊張感が無いからダメ」と「割れるガラスにする」とか言って、やらせる。公演で中日を過ぎて、「なんか役者たち弛緩しているな」と思ったら、「今日はガラスのコップでやってみよう」「本物の水を飲んでみよう」と、ルドロジー上、ルドゥス値を上げる。

ちゃんと演出を付けられていれば、コップが割れた時、登場人物のリアクションが自然に出る。

あんまり『あり思』第三巻でできなかった話、遊びと四分類と舞台劇、競争があって運があって、めまいがする、そんな舞台。模擬が当然一番強く出る。これをできているなど感じるのが、鴻上さんの舞台。前に書いたと思う。

ちょっと触れると、ダーツという小道具を投げている。

ミステリたちがする演劇、ミステリープレイと言われる。(シェイクスピアものを手掛ける作家は「ああ、あの資料を読んだんだ」とわかる)

神秘の意味ではなく、ミステリと呼ばれる普段は職人たちが舞台装置や持ち道具を作るのがうまかったと思われる。聖史劇という言葉だと、違ってくる。ともかく彼らが現在のステージトリックの起源的な奇術の小道具を作っていたのではないか？

ただ、こんなことをやっていたら、いつまでたっても「シルエットアクター」終わらねえじゃねえか、となって話がちっともすすま虫である。江口寿史みたいにマンガを描かなくなる。(これのせいでまたネームが遅れる)

狂言で身体を棒と縄でがんじがらめにして、飲めないようにすれば、お酒という消え物はマクガフィンになる。(吾妻ひでおの『アル中病棟』を劇にしたいが映画なら森田芳光監督)

同じく、聖霊というものも、取り入れることで、消え物のマクガフィンで、左耳から入る。(ヤン・コットの資料を読んだな)

有名な逸話、常温の火箸を役者に熱い火箸を持っていると思い込んで、握ると手の平に痕がつく。

システムによってよく訓練された俳優は、もしかしたら、できるかもしれないという白熱した演技と、もうひとつはステージマジック、繰り返しになるが何かの薬液(A薬)に触ってから、火箸に塗っている薬液(B薬)と化学反応させて、手を赤くする。そのトリック、道具を使ったメンタリズム。

薬物と芝居は隣にあったのではないかという、説、である。ステージドラックなのか、そういう事をしていると思われる。

『孤独のグルメ』の起源か、裏の小道具、薬物の消え物というか、沙翁の時代は怪しい錬金術が信じられた時代である。昔は白粉の中に水銀が入っていたから、すぐ落さなくちゃいけないくて、歌舞伎小屋にフロが備え付けられていた。

今は、舞台の技術が上がったから、そんなにやらなくていい。

赤い照明とか、いろいろできているから、わざわざやらなくても、いいのである。水銀が入っていない白粉、普通に化粧品のファンデーションを芝居に転用すればいい。現在は安全性の無い化粧品は市場で売れない。

話を急に変えて、逆説のマクガフィン。

きだつよしさんの戯曲で、変身ヒーローが変身するためのアイテムを無くしてしまっ

た。紆余曲折の果てに、失せ物を見つけるが、「もう、これいらぬ」と特撮ヒーローのアイデンティティーを投げ捨てて、難局に挑む。

キャラクターは成長している。これは特撮番組なら最終回しかできない。『仮面ライダー ウィザード』で「魔法の国が消えていく」があっちゃいけない。(石ノ森作品のデータベースからはあってもおかしくないが子供向け特撮番組の枠だと)

これも「扇を知らない」物知らずの太郎冠者と同じで、マクガフィンとは役とリンク、違う言葉で同期している。

ただの小道具・持ち道具は、役と同期してない、リンクが切れている。

だから変身ヒーローに変身グッズである。変身アイテムが無くなるのは、ズボンを半分にしちゃうような、狂言から来る喜劇の様式か、ヒーローが出てくる活劇の様式の違いでしかないのである。

確かに『ウルトラセブン』は、ウルトラアイの強奪のシナリオが頻発する。これは前作『ウルトラマン』がすでに放送され、最終回は視聴率40%で視聴者に情報共有され、宇宙人も何故か情報共有している。(『ウルトラマン』は宇宙でも放送され高視聴率だったのだろう)

前作のシリーズでカプセルが変身のために必要という設定がウルトラアイになって、マクガフィンとしておなじみになっている。もう情報を役と観客が共有化している。

『ウルトラセブン』から入った「ご新規様」の初見さんには、確かに説明不足で不親切だけど、そうした説明がない分、テンポがいい。

経費で落とすためだけに、『ドーナドーナ』というポルノソフトで、メインストーリーは地の文は抜いてくれと、テンポのことを考えて指示したそう。まどろっこしい地の文をえんえん読まされるのは、「ノベルゲームやっているわけじゃないぞ、ゲームパートをやらせろよ」と文句が出る。

「ああ『同級生リメイク』、経費で落としたかったなあ」

そんなきださんが、このウルトラアイの強奪をインストールして、特撮の脚本を書くのは、特撮批評というより、劇としてちゃんとしている。(ウルトラアイをドナドナとか言わなくていいのか)

パロディ作を作る人でも、こうして庵野秀明監督と差がある。その差異を比べてみるのが、批評ということになるのだが、どちらも仮面ライダーを作る事になるのだから、いいのである。

今まで話した事を復習的に箇条書きすると、

メソッド・システム → 役(俳優) → 小道具

で、反対に小道具はメソッドかシステムから逆算して作る。つまり、道具が先にマクガフィンとして在るのではなく、システム or メソッドが小道具をマクガフィンにする。シナリオで同期・動機を作る。

- ・ 肉体メソッドの場合、物理的に骨壺を用意する

- ・ 精神メソッドの場合、俳優の精神・内面の中にある無形のマクガフィンを取り出す

伝統メソッドはあまり説明していないが、

- ・ ウィルス・病原菌のようにキャリーしていたなんらかのマクガフィンを師匠から受け継ぐ

のだろう。

例となるか、現代の演劇である「在庫に限りはありますが」は作・演出の人が人前で食事ができないという。その「イップス」を演者に植えている。

そういえば、ただの小道具をマクガフィンにする俳優訓練に生かせないと、いけないという話ではなかったか。

よく訓練された俳優であれば、そんなに演出家の技量はいらぬ。

前述の「おばさんを殺した凶器」だけで、やるのがわかる。

訓練を受けていないと「おばさんを殺した凶器」だけじゃ、わからない。

その場合、カツシンの両親の思い出のように、「おばさんにはよくしてもらった」「おばさんとは小さい頃可愛がってもらった仲だ」「そのおばさんを失ったんだ」と、感情訓練を終えていけば、引き出せる。

それでも演技ができてないと、灰皿が飛ぶのではなく、竹刀でバシバシ床を叩くではなく、「それじゃあ、遊園地の思い出とか考えようか。おばさんに遊園地に連れて行ってもらって、一緒に乗り物に乗ったり、迷路に行ったり、ちょっと喉が渇いてアイスクリームを食べたアイスクリーム」という感情訓練そのものというか、催眠術師に近いような、やはり子供の頃食べたアイスクリームという消え物をとっかかりにして、感情を引き出す。

戯曲を舞台にかける稽古時には、ここまでやらない。

こうした感情訓練が、すでにできた俳優が舞台に上がる。オーディションか何かで選別されて、できるヤツしか舞台に上がれない。

Sシステムの問題点はここにある。俳優学校で学んで、生産活動になっている。果たしてそれは、正しいと言えるのか、百年ぐらい前からの古い製造方法のSシステムで、芝居の大量生産品の劇、俳優という部品を組み、劇を作る。映画テレビドラマ舞台演劇が世の中に溢れているのは、こうしてSシステムのおかげではある。

ここで、芸術の時間問題、カルテットで45分演奏、総労働時間三時間を「効率化」で短くすることはできない。(最近、テレビアニメ録画、二倍速で観ちゃうなあ)

それは演劇でも同じ。だから、稽古時間やりハーサルを短くするために、Sシステムがある。

ところで、中島らもさんの話題をしていなかったと思う。

『しりとりえっせい』には、消え物の竹輪の話題がある。

「このこは竹輪が大好きなんですよ」

と、アニマルエクササイズで亀を演じている升毅に、竹輪を眼前まで持って行って動物博士役のらもさんが自分で食べる。それで公演と公演の間が開いて、自分の衣装のポッ

ケに入れっぱなしにしていた腐った竹輪を、今は白髪の升毅に食わせようとした。(週末から週末の間に腐った?)

これを真似して、ここだけの秘密だが、幼い姪に「この子はチョコレートが大好きなんですよ」と……姪の母親である姉さんに怒られる、怒られる。

チョコレートついでに、私もアイスクリームの思い出がある。

お小遣いが五百円の頃に、容量大き目のアイスクリームを買って、少しずつ食べる。

ある種、これを繋げて、「小僧の神様」じゃないけどおばさんにアイスクリームをおごってもらった。その「おばさんがっ」というところまでやる。

マクガフィンには俳優の中にある。

Sシステムで取り出しやすくする。

ナッジ理論はこうした俳優訓練と言えはおおげさだけど、受け手にアイスクリームを食べたくなる…「ななつとみつつとひとつ」で、なんで売店でアイス売ってないのか、客がクレームというか、アイスを買わせる戯曲だろ。昔の紙芝居を見せて、駄菓子を買わせるような。

それは別としてだから、あて書きするってわかる。俳優のことを知っている座付戯作者は、酒宴の場か何かに集まった時に訊いた「子供の頃、こんな事ありましたよ。焼きうんこというね・・・」を心の引き出しに取って置く。それを使いませば、自然と俳優と小道具が繋がって、マクガフィン化する。

えっ? 私のマクガフィン?

う〜ん、そこまでいうなら、仕方ない。

オクテヴィアさんが、無理矢理ビアンカのパンティを脱がせて、広げて臭いを嗅いだりして「か〜でいなる か〜でいなる」とか、「お医者さ〜ん」と頭に被ったりをやってると、それを見た千石ミケーレが「苺柄だっ!」と驚く。

「くちゅん」とくしゃみをして、ビアンカが生い立ちを話す。亡くなったお母さん(フィリップ王のお父さんこと大フランソワさんにフランソワされた)の「肌身離さず持ってなさい」という言いつけを守ってハンカチーフをパンティに繕ったのである。(後でたぶんどこかにハンカチーフを取っておいて、同じ柄のパンティを繕っていた事になると思う)

ジャンプイズムである。

「これが私のいちご100パーセントです」

「おばさんを殺した凶器を反転させたモノだ」

(苺柄の布切れを)「か〜でいなる か〜でいなる」

ついでに、なんたら・オブ・アラゴンの正妃(フィリップさん? ここで名前を決めていいの?)がビアンカちゃんの母を薬物で殺めようとした。(理由は「この場では言えない」)

この毒物をとりあげてシャルルが持っている。んでクレシダの「おじいちゃんへのお便り」を盗み読んでしまう。

正妃はまさか自分の息子に使われるとは、おしゃか様でも気づくまい。(なんだか偉大な悲劇をゲンちゃんの言葉通り、うっかり作ってしまった)

ちゃんとシェイクスピアの戯曲を読んではいけば、そういうシナリオ、自然と書けるよ

うになる。ル=グインの語ることは、聞く事。聞く事は語る事。

ルクリスを語る事が、シェイクスピアを聴く事。(ごめんね、暴虐王シンベリンにして)



## 幕間 図画説明三



## 図説で単純化すると

形・肉体偏重メソッドは  
たとえば、ハントマイムで手にモノを  
持っているふよふよ感である



精神・心偏重のメソッドでは  
自分の内面からマクガフィンを取り出す

ここで伝統・古典メソッドは  
マクガフンの前に しっぽや何か他のモノ  
を植える それが続きとなる 4 で語る

gazou03.jpg



あとかき



あとがき 嫌儲を撲滅するなんてできない。



江口寿史 +.jpg

画像をごらん下さい。

これは、私の著作である「兄になりたかった人」を無根拠にケナしている。

どこでも書いているが、実はいしかわじゅん先生本人に、「兄になりたかった人」を献本している。「週刊文春」にマンガ評の連載をしていたいしかわ先生に、寺田ヒロオさんのことについての電子書籍をEメールに添付して送付している。

これは「週文」が悪い。

スキャンダルを報道しているが「週文」自体がなんらかのスキャンダルを内包していると、思われる。

いしかわ先生がマンガ評で『ちびまるこちゃん』を終了して、残念がっていたから、ストーリー漫画として終了してはいるが、四コマとして地方新聞のあるグループ（三社連合？）に載っていた時期には、その事実をハガキに認めて投書した事もある。

そうした読者をないがしろにしている。

もしも、この本を読んでいるあなたが、なんらかの演劇を劇場にかける場合、こういう事に耐えなければならない。

自分のお金を払って、チケットを買った人は文句を言う、めちゃくちゃ言う。

いしかわ先生の書いたコメントみたいに、「観る価値ゼロ」と言われる。

もしかしたら、これの比ではない。

それに耐えなくちゃならない。

さらにお金を払ってくれたなら、まだマシだけど。お金も払ってないフリーライダーなのに、文句を言う。

なんて事は無く、いしかわ先生はキャプションしか読んでない。お金も払ってないのに、自分の読者が作った本をケナしている。つまり、チケットを買わず宣伝フライヤーだけ読んで、劇をケナしているようなもの。

それに、どうも、嫌儲らしい。

別に嫌儲でもいいけど、彼ら嫌儲を説得するのは、難しい。

数か月に及ぶ執筆労働時間をペイメントするのは、10年か20年かかると、私は勝手に踏んでいるけど、しかし受け手には「すぐにお金になる」と思われている。

はっきり言うと、10年か20年でペイすればいいが、場合によってはペイできないかもしれないとも思っている。他の電子書籍では、まったくペイは期待できないのも、あるにはあるのだ。

無理にこの件を引き寄せると、演劇でも同じ。

成井豊さんはたくさんの観客に観てもらうために、ハーフシアターを編み出しても、「金儲け」と思われてしまっていただろう。（おそらくチケット代は当時の半額にしているはず）

困った事に、彼ら嫌儲が、伝統芸能を結果的に潰す事になるかもしれない。

大阪市の例にあるように地方自治体が、文楽などの助成金を払うか、払わないかで、もめてしまうのは、裏には半知性主義的な嫌儲思想がある気がする。

余計な事をもう一つ足すと、多くの資料に目を通して、中には中野晴行さんの資料（『新寶島』の解説等）も読んでいて、私はこんな事を言われる。

私の場合、はじめから嫌儲にわかってもらおうなんて、思わない。

文章が読めないのだから、仕方ない。

捨ておく他ない。

ただもし、これを読まれる読者の中に、嫌儲に絡まれたら、どうすべきか、は自分で考えないといけない。たまたま、いしかわ先生は、私の文章が読めないから、運よく本人に説得しなくてよかった。

「お言葉に甘えるようだけど」

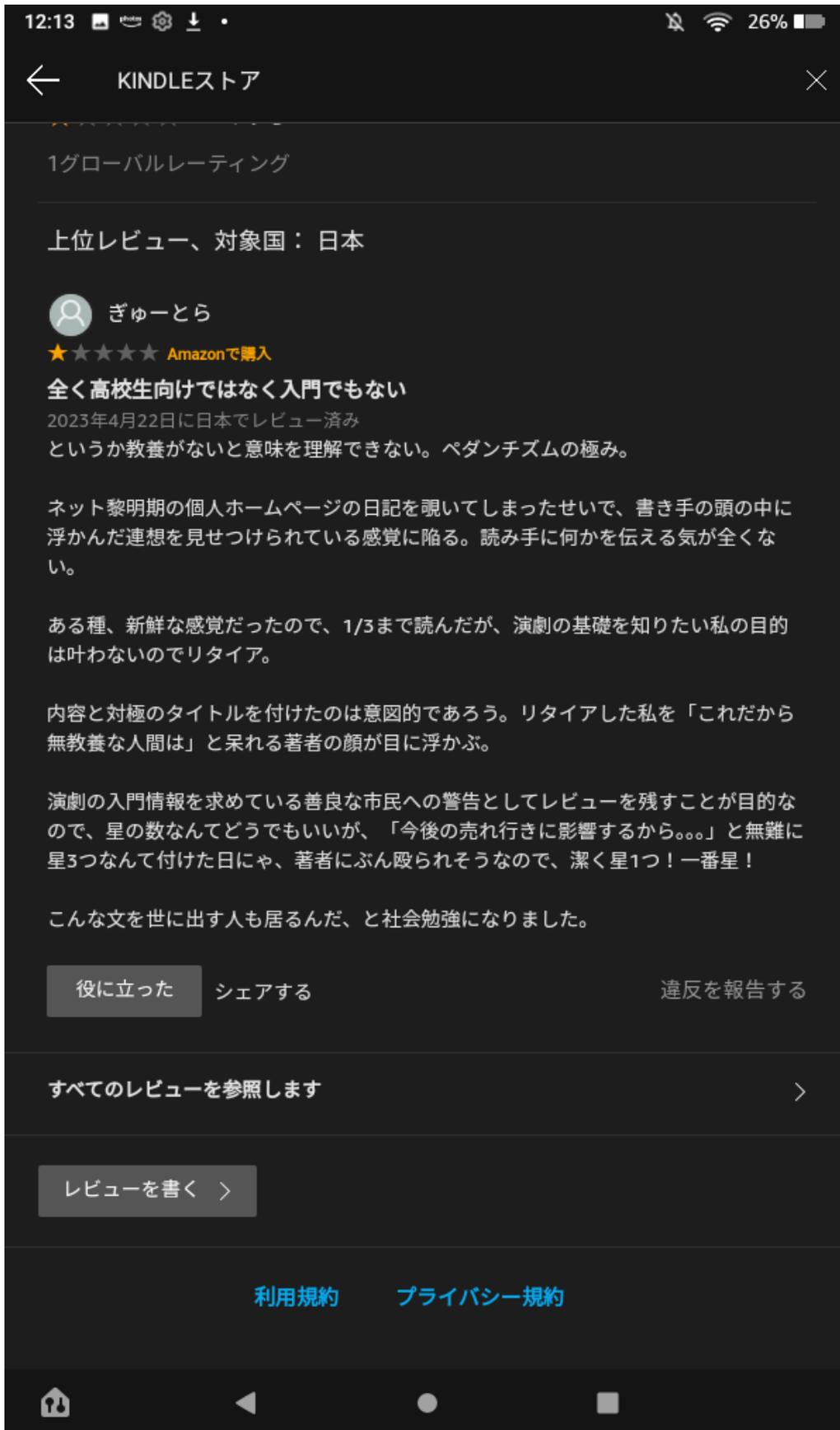
チケット代が高いから、観ない。観てないのに、見当はずれなことを自分の劇に言っている、「観る価値ゼロ」とか、勝手に言われ事もありえる。それに対処するのは、難しい。

戯曲の中で、そういう絶対に認めない人間を登場させて、やりこめるシナリオを書くのも、いいだろう。

私は、一応、若い世代に伝えるという手段を選んだ。

それが功を奏すかどうか、さすがにわからない。

嫌儲の次に現れたのは「ググレ、〇ス!!」



Screenshot \

お客様暴君なのか、スシローのスシテロみたい事する人がまた現れた。

今まで読んで、果たして読者は、これと同じ読感を得るだろうか。

表紙詐欺みたいな、タイトル詐欺と思われてしまったのか、ボックスシステムについて語ったまえがきを読んでいないのか、タイトルとキャプションで全てが語られていないと満足できないようだ。

「それ、はじめから読む必要ないじゃん」

と、なんらかの情報商品でタイトルとキャプションで、全て語られたモノを買う必要があるのか、嫌儲と呼ばれてイキって来たのか。

そもそも書名、ブックタイトルの命名に迷っていて、足して単行本にまとめる、マンガで言えば第一巻にあたるから 99 円の格安にした。

というより、“入門”は著作権的な問題が発生するかもしれないために、後付けと思われるでもいいが、実は出版的な問題で、「学習」のテイを成すために、「入門」を便宜上、使っている。

引用のルールとして「報道」と「批評」そして「学習」があるわけ。けっこうな情報流出になっているところが、あるから。たとえば中島もさんの創作の中から、引いているのは、場合によっては著作権継承者である娘さんが、「お父さんを馬鹿にしているでしょ？」と言ってくる可能性もある。

それは「学習」にあたるから、許してもらいたいと。それでもダメなら、さすがに著作権者のいう通り、部分をカットしないとイケない。

だから、他の書籍でも「入門」「超入門」のタイトルが付く本が多いのは、実は「学習」で引用をして、著作権対策だったりする。正直、著作権の事を学んでも、何が引かれるのか、わからなかったりする。

高校生“向け”とは言い難いのは、固有名詞や昔の話題のためには、まえがきにあるように、認めるけど、そこはボックスシステムだから、中に何かを入れるのは、読者次第とまえがきにあたる「□はボックスシステムだ。」に書いてある通り、現役高校生だけが読者、というわけではないし、高校生[の頃、演劇部に所属していなかった人]の演劇入門であっても、いい。

他の高校生を除外してはいないが、高校演劇をする演劇部部員は想定している。

なぜなら『俳優修行』がないかもしれないから。普通なら部費で買っているはずだけど、演劇部に歴史が浅く、活動実績も少なく、部費が少ないと、所有せずにいる学校もあるかもしれない。

それで高校生でも買える値段として、百円ぐらいにして、最低価格にした。たまに、無料配信もある。

だから「高校生向け」部分があるとしたら、価格設定、値段にある。

懐が痛まない額で、示唆を与えたい。それが“高校生の[演劇部部員のための]演劇入門”に結果的になれば、いい。

読めば、伝わらなくても伝わる。

ちょっと矛盾があるように読めるけど、貧困を想像したくないけど、高校までしか演

劇ができない子も、いるかもしれない。裏方さん大道具小道具、衣装の人にも読んでほしいから、値段を安くしておく。

かといって高校生だからといって、甘やかさない。

高校生といっても、ピンからキリまでいる。わかる人はわかるし、わからない人はいくら伝えても、わからない。高校生のよう甘やかしてほしいなら、それはやらない。大手出版社の kindleUNlimited にしていない本を書き切りで買うべきだ。本当に演劇に入門したいなら、鴻上さんの本を買うべきだ。

「それは、オレの客じゃない」

駄サイクルにならないように、ちゃんと値段を付けて売ると、米光一成さんの言っている通りに、ちゃんと批判してくれる人がいると思ったら、おかしい批難が来る。

ネプチューンマンや『北京原人』の「ウパー」とか、うんこのレプリカを陳列したハイレグジーザスの話題があるのに、銜学主義だと？

私程度の書いたモノで銜学主義なら、浅田彰の『構造の力』なんて読めません。

私も読んでいません。だから当時言われた十万部の購読者が日本国内の知識人の全数で、私は中には入っていない。銜学以前の問題である。

たしか専門用語で所々、一般には使わない言葉があるが、たとえばプロ倫は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』だけど、それは説明しない。そんなことまでしていたら、いつまで経っても、終わらない。

だけど、「宗教が芝居を作るか、芝居が宗教を作るか」のテーマがあるから、一応は触れておいた。こうして読者自身が“わからない語句”がもしあったら、調べる。それを事前に言い含めているから、注釈や用語解説を入れなくてもいいと思っていた。(本当はプロテスタントの人の内面はどうなのかという精神メソッドの話にはなる)

頭の柔らかい高校生なら、記憶力も良く、「あれってなんだったんだろ？」と初めは思うかもしれないけど、そのうち、「あの事だったのか」とわかる。(それも高校までしか進学できない子もいるとわかっていると、苦しい)

問題意識やシステムとメソッドが何故、分れてしまったのか、「入門」前の事前情報も得られるはずだ。

代用品だけど、結果的にマーガリン効果が出ればいい。

たぶん kindle UNlimited では鴻上さんの『俳優になりたいあなたへ』と『演劇入門』が読めないはずだ。だから、こちらの「演劇入門」で代用しようとしたのか、その苦情はこちらは承れない。

コンテンツの充実が悪い。それは kindle くに文句を言うべきで、kindle UNlimited のカスタマーレビューに書けばいいでしょ？

そもそも販売開始の6月から10か月、十部も売れていない。「嫌儲を撲滅するなんてできない」にあるようにペイには10年20年かかる。そんな売れてない人にやったら、すごい弱い者いじめになる。

それで、タイトル詐欺だ、なんか儲けようとしていると、勝手な憶測されても、ほとんどの Amazon 作家が困るだけじゃないか。

鴻上さんの『演劇入門』があるから。新しいとの、ちくまプリマーブックスの『俳優になりたいあなたへ』もあるから、いくらでもこちらはひねった事、ストレートじゃな

い事をできると踏んでいた。

だから、まだ未完成のメソッドとシステムの話をして、それをなぞっていけば、自ずと演劇に入門している。

マネタイズをするのを焦っていたのは、苦しいが認める。

四月の第一週、せめて一学期には読み終わってほしいから、もう夏の全国大会があって、秋の予選大会があるんだから、普通に勉強で忙しいし、

6月になって、やっとまとまってきて、ともかくキャプションもおざなりに書いた。

伝えようとしてないって言われても、「わからない事があったら検索して」と、書いているのに、なんで検索して調べずに、銜学に突き当たるのか？

それにティーチングオーバー、「教えすぎるな」と。

気づかなかったら、自分のモノにならない。失敗しないと身に付かない、自分で気づかないと身に付かない問題と同じ。

だから、伝わらなくても、伝わる。やがて、芸の肥やしになる。

あんまり言いたくないけど、強豪校との差が開いていく。それは無料の動画を観て、事前にコツを学ぶ効率重視もあるかもしれないけど、何か『俳優修行』のパチモノがあることで、小さい差を埋める手立てに、これも結果的になれば、いい。

初めから、強豪校の差を埋めろって言われても、それは無理だよ。

小規模の劇場が備え付けてあったり、OBOGがたくさんいたら、『響け！ ユーフォニアム』の飛鳥先輩みたいに読み終わった演劇指導書を厚意でもらえるかもしれない。新興が伝統校の歴史を覆すのは、難しい。

だが、世代世代が努力を積み重ねれば、ありえるかもしれない。

本当は私は、ここまでは言いません。

むしろ高校生たちを人質に取りました。

それにしても出版業界が疲弊するの、わかるよ。

三分の一しか読まないで、カスタマーレビューを書いて、「作者が殴りつける」と勝手に思い、「こんな文を世に出すな」と、デビュー前の高橋源一郎が言われたような事を書かれる。フォロワーだから仕方ないけど。

これで思い出すのは、「荻家の三姉妹」の観客だ。

りゅーとぴあ新潟公演を観に行った時、前の席に家父長制を絵に描いたような老紳士が座っていた。

その人物は前半と後半の間にある、トイレ休憩でいなくなっちゃう。後半の話を見る気が失せたらしい。

それは、永井愛さんの脚本で、その老紳士が期待しているだろう旧家の一族が家父長制を肯定する話を書くわけがない。

だけど、彼はどこか不随だった。杖を持ち介助人に介助されていた。

後半、脳卒中を起こしたお手伝いさんが出て来る。

それで半身不随になったが、しかし、お茶碗を持てなかった手が、再びお茶碗を持った。だが、お茶碗をとり落とす。

それは見ていただきたかった。

自分が障害者となった時、差別されて、自分が女性の権利を実は侵害していたと、気

づいてほしかった。持てなかった茶碗を女性が手に取る時、その茶碗を落とさせていなかったか。

本当に「演劇入門」をしたいなら、本を読む前にワークショップに通うとかするべきで、なんの「入門」をしたいのか？ 俳優の演劇入門なのか、演出家の演劇入門なのか？ 戯作をしたいのか？ それとも観劇の演劇入門なのか？

俳優になりたいなら俳優訓練の指南書を読めばいい。

演出や作劇なら、ブレヒトが書いた本があるはずだ。

観劇なら、東宝演劇のパフレットがあるから、それを読めばいいと思う。

「わからない語句」があったら、調べると書けば、安心していただけなのに、なんで調べない人が演劇、他のあらゆるジャンルにも言えるが、「入門」しようとしたのか？ そもそも「入門」しようとはなから思っていなかったのではないか。

犯行動機で考えられるのは、二つ。

サッカーの事をバカにされた等、私に悪感情を抱いて報復として営業妨害しているか、初めから「ケンカを吹っ掛ける」つもりがないと、あんなカスタマーレビューを書きません。

あるいはまた業者で、広告代理店の下請け下請け、さらにまた下請けで依頼料10万円払われているのに、中抜きの中抜きの中抜きで、手取り5000円ぐらい（レートでは5,000円から一万円で「証拠画像、見せようか」）でこのカスタマーレビューを書くと、言われる。

同業他社にとって、小さくてもライバルを蹴落とせるから。私だけでなく、被害を被っているAmazon作家は多々いるのではないかと、だから中森明菜の推しが、松田聖子を不当に貶める記事を書いていたんじゃないかと、疑っている。

逆に不思議だ。なんで、こんなカスタマーレビューをアップするんだろう？ アップする前に「やりすぎだ」と、踏みとどまらない。こんな事でお金をもらいたくない、思いとどまらない。貧すれば鈍する。

もし業者に頼まれずに買い切りならケナし料いくらになるんだ？

皆さんも、サブスクで芝居の動画をうかつにどこかに配信したら、劇評としてこういうのが来る。きっと来る。

「高校生の[頃に演劇部に所属したら先生や先輩にしごき抜かれて演劇すべてに恨みを持つようになった人には向かない]演劇入門」であったかもしれない。

そういうPTSDの治療に、俳優訓練を使えないか、俳優セラピーができないかと考えている方だ。

弟子がミットを蹴ったら、佐山サトルがビンタするのを書いていたのだが、それで私も何かビンタすると、勝手に思われると、「お言葉を返すようですが、伝えたくても伝わらないのではないのでしょうか」としか言えない。『真説・佐山サトル』を読めば、なんで佐山がこんな事をしたのか、わかる。

読まないから、真意がわからない。

佐山が実は一芝居打っていたという事だろう？

それを勝手に伝える気が無い、と。

「情報流出を求めているだけ」で、学ぶ気が無いんじゃないか？

極端には極端な例で返すけど、ミステリー作家が何かの本を書いて、その中で本当の  
マダーケースを話題にしたら、「☆を三つにしたら、このミステリー作家に殺されるか  
ら、ここは潔く☆一つにする」と、本を読んだ人がカスタマーレビューに書いたら、そ  
の本を読んでカスタマーレビューを書いた人がちょっと、何か、疑ってしまう。

何書いているの？ この人？

天然？

天然の可能性を示唆したのは、他でもない。「こういう劇評が書かれるよ」と、あとが  
きに書かれた通りのカスタマーレビューをうかつに書いたりするのは、天然であるから、  
ではないか。それを書いてしまったら、自分の評価が悪くなってしまう。

むしろ、それは高校生向けじゃないのか？

様子がおかしい劇評を書かれる事があるんだよ、あとがきに書くと、本当に様子がお  
かしいカスタマーレビューが書くという予想通りの事が起きて、それはまだあまり劇評  
を書かれた事が無い演劇部の高校生たちに、知ってもらいたいから。

☆

再三に渡って書くけど、芝居をもし上演したら、こういう劇評が書かれる。

そういう事は演劇の門をかいくぐる前に、覚悟しておいた方がいい。

そして業者の一番の容疑者はサイバーコネクトツァーなんだけど、こんな事をしてい  
るから、モントリオールスタジオが閉鎖される。

自業自得。

おまけ／消費税分のサービス



## デウス・エクス・マキナ論

メソッド&システムとは離れる話題、何かしたいと、思っていて俳優のトレーニングをどうするんだ？ 「シルエットアクター」にそれは無いじゃないか！ と、クレームする変態はいたと思う。演劇の変態である。

しかし、こんな事書いていたら終わらない。

いつまでも終わらない。

いつまで経っても終わらない。

今回は、演出と言うか、古典的というか、そんな話である。

サミュエル・ベケットの「ゴドーを待ちながら」は不条理劇、象徴主義系統で、ゴドーとはやってこない神の象徴とよく言われる。

キリスト教圏だと、ズバリ父なる神、ニーチェ的な神が死んだ後の近代社会を戯画化しているというか、これを反転させたものが『ハイジ』の原作小説、とくに後半なのは、言わずもがな。近代社会で取り残された人を宗教で折伏というか、そんなのは誰も見たくないから、アニメ化されていない。

劇においては、神とは機械の神、言わずと知れたデウス・エクス・マキナである。機械仕掛けに乗った神に、デウス・エクス・マキナのルビをふる。

その神がやってこない。ギリシャ古典劇で、かつてクライマックスにローマギリシャの「神」を擬えた大仕掛けの舞台装置（メカナ）を出して、終劇に導くという、これの反対がカタストロフィであろう。終局に登場人物があらかた死ぬ、すると不思議とカタルシスが得られる。「ハムレット」で主要人物たちが死んで、次の王様になるフォーティンbrasがいて終幕する。

そんなFBは、ある映画では、まるまる存在をカットされている。

不思議に思う人もいると思うので説明すると、だが文庫本の解説の情報流出になるので、少ししか書けないが、ハムレットの母とFBの母は姉妹で従兄弟同士とする説、ちょっと遡るとマクベス（マクベス夫人の名前はルクリスじゃないのか？）とダンカン（ダンカン）は親族同士でバトルロイヤルだったという、それで王位継承権があるという。

このようにシェイクスピアさんでも、急にダイアナさんがやってきて、とりなしてくれるというか、マリアさんが演じるダイアナ（アルテミス）が「全部、誤解よ（てへぺろ）」と言って、このダイアナはエリザベス一世を象徴するとか、エリザベス派に目配せしているのか、そんな事はないと思われる。

占い師の託宣でジュピターがこんな事言いました、彼が夢枕に立った通りですと、大丹円に向う。

これは夢枕に立った坂本龍馬で、暗号 皇族の枕元 シバリョウ タケテツ お〜い 龍馬読んで ホリエモン ライブドア事件悪いのは全部武田鉄也という、沙翁浪漫劇時代はだいたい、こういう終わり。(後述するブレヒトは釈然としないのを回収)

手塚マンガでも女神さまが出てくるのは、家に背表紙の教養として本棚に置かれる名作集の中にはシェイクスピアや機械仕掛けの神が出てきて終息する古典が、けっこうあったのだろう、その影響を受けている。(具体例をわざわざ言うと『ヴァンパイア』でマクベスをもじった間久部緑郎は三人のおばあちゃんに会う)

現代劇はそのデウス・エクス・マキナが出てこない。神のいない不条理世界の中の人生を、俳優たちは生きている。

アンチクライマックスという言葉があるように、クライマックスのピークが無い。このたとえば人気薄で連載が打ち切りになった終わり方のような、違うインプレッションを与えてしまいかねない。

だから、森田芳光監督がフロイト精神分析的に、脚本を書いて芝居をつけてしまっただけから、ちょっと変わっていく。それは日本映画「古来」の芝居の付け方ではない。(逆に流行っちゃって一度陳腐化して、もう一度心理学的にキャラクターを動かしたのが片淵監督)

『うああ哲学事典』を読み返したら、「心理学の商品化」という記述がある。それに監督は成功していたのだろうが、そこは皆が言う、つまらない部分というか。

ロジジュリを新旧の宗教対立だと、誰でもわかるけど、面白くなる。

キュピレット家とモンタギュー家、どちらかが新教と旧教というわけではなく、対立しており二人の若者の犠牲がなければ、新教と旧教の和解は無いという、平面的なテーマに回収されてしまう。「面白みの無さ」につながる。現代的には、今が分裂している北と南の朝鮮半島で、「愛の不時着」みたいなドラマになる。(もっと言えばテーマを2.5次元にし易いからだけど、そこは主旨が違う)

逆に言えば、心理学は資本主義の市場主義経済下では知能労働したら商品化できているのだから、大学生を持つ親御さんが求める「役に立つ事」なのかもしれない。

そういえば、この間、松山洋が「ファミ通」で話題(「これからエヴァ公開だ。楽しみだ」とのーてんきに言って一度公開延期になる。疫病神じゃねえか。多根さんにどのくらいデスブログをやってるか、お金を払って調べさせたい)に触れていたから、なんかエヴァンゲリオン嫌いになっちゃったから、完結を期にいくらかでも悪口を言っても大丈夫だし、桜井さんも「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」と「ゲームについて思うこと」で書いてあるから、お言葉に甘えさせてもらって、悪いオタクは皆、悪口を言うし、心を『発情期ブルマ検査』(と学会年間大賞)の作者にして、それにエヴァがイヤでも、別に何も影響がないし、人気が確乎としてあるし、揺るがないし、更科さんの何か言ってダメになる作品じゃないから。(どうでもいいけど、エヴァンゲリオンの話をすると、みんな発情ブルマ日記の作者になる)

『金閣寺』の金閣を天皇と解釈するぐらい、つまらなくする言説を出すと『エヴァンゲリオン』が心理学の最大のヒット商品で、心理学の兄弟同盟の原父殺し、こうしたフロイトの精神分析の話題を出すと、本当につまんなくなると皆言っている。本当に言っているから、繰り返している。

万人にわかってもらうために、「萌えはお金を払ってしまうくらいかわいいという事です」と言ったら、行間が無くなってしまふような、萌えている人にとってみたら「ブルドーザーで道を作るようなマネ」をされて、居心地が悪くなる。

反論された「萌え」の説明をよく聞いてみると、それ「推し」の説明しているだろう、と。

そもそも卒業してしまった。新劇場版の新シリーズが始まって、一度も映画館に行かず、DVDを借りて観ていた。

LCLとは血の象徴で、その血とは原父殺しを終えた兄弟同盟の兄弟たちが、死んだ父の血を飲み干す、共犯関係を築き、世界最初の契約？ 原初の契約宗教の姿を垣間見せる。エヴァ、というよりイヴの呪いというか、そんなこと「エヴァ本」に書いてあるので、あんまりいいすぎると、特撮映画企画「パーフェクトヒューマン」の悪役、ショウトウの側の人物として配役された庵野秀明がやってきて、「キミは上級国民がウンタラカンタラ」になる。違う。デウス・エクス・マキナである。顔を出した光の巨人の代わりに眼鏡の巨人ではあるが、『ガッパ』に出てくれたんだから、一笑いでこちらでも出てほしい。(まるで『ガッパ』に出演したのは一笑いのためだったみたいじゃないか)

肩もあつたまった事だし、子供の頃、スーパーロボットものを観た事あるなら、おなじみのアレでわかる。

Bパートの後半に文明の象徴である街を壊すロボットや怪獣を、スーパーロボットが倒す。マジンガーZの兜博士の言うとおりの「神」になった場合のデウス・エクス・マキナとしての機能を託された「スーパーロボット」(機械仕掛けの主人公機)が倒す。これからも作られる必勝パターン(だからすぐに飽きられる)である古くは、歌詞にもある「善も悪もリモートコントロール次第」の鉄人28号からあり、博士の発言「お前は神にも悪魔にもなれる」はそれを引き継いでいる。

演劇論的には二択、神になったらデウス・エクス・マキナ、悪魔になったらカタルシスがあるような、破局を起さないといけない。(永井豪の『デビルマン』はまさにカタルシスがある)

これでわかるように、不条理劇は神も訪れないし、何か大きなカタストロフィも起きない。

第三の選択肢だったのであろう。

こうしてマジンガーZの頃からやって、東映から引き継いで日本サンライズ(当時)の長浜ロボットシリーズがあり、そこに関わってのが、“たれあろう”富野監督である。「たれあろう」なんて書くのは司馬遼太郎だけ)

日大芸術学部の映画科出身で、古典的ドラマツルギーの方法をわかっており、テレビアニメ黎明期の『鉄腕アトム』の頃からロボットドラマに携わっていたのだから、当然デウス・エクス・マキナのロボットアニメのシリーズだけを作っていくと作り手として飽きており、それは受け手も同時で、「連邦の白い悪魔」を制作することになる。

そしてイデオンで大破局、星間をまたぐ戦争をしているけど何も解決せず、宇宙規模の巨大なカタストロフィを起して幕引きとなる。(このあたりを「蜷川幸雄と富野良幸」で膨らませて語られるだろう。同時期に蜷川も「王女メディア」をやっている世界のニナガワになった…シェイクスピアも同じくそれがある)

スポンサー撤退というデウス・エクス・マキナが降りない、カタストロフィ。

と、言い換えていい。

こういう話になったら、必ずしている感のあるレギュラーのミランダXの話はないのか、読者の皆さんもご期待されているのはこちらも心得ているので、今回もそろそろはじめたいと思う。

皆さんもお気づきの通り、『アイカツ!』や『ラブライブ!』でも、機能は同じ。サンライズは長年スーパーロボットを作り、その構造を転用しているのは百万回指摘されていると思う。

ミランダXのことに触れたいのでアエテするが、Aパートで話の発端があり、Bパートで話を詰めて、その後半に歌と踊りのライブシーン（主にコンピュータの仮想上に立体で行われる）という、定型パターンがある。

それが終わると、不思議とドラマも終息に向かう機能性、なんというかデウス・エクス・マキナの機能がある。マジンガーZがBパート後半で出てくるまで、焦らすドラマが起源から何故かここまで辿りついた。（よく観ると女の子達は気持ちのセッティングしているだけなんだけど）

3Dポリゴンの女子は機械の神の顕現と偶像崇拜の偶像の意味のアイドルに戻る。大袈裟に表現すればそうなる。古代の神殿で催される、巫女の踊りだろうか？ 神の似姿、女神像とか、究極的には神人同形論で、イスラムなら「それダメ」で偶像宗教（仏教）なら「いいね」と。つまり、ミランダXをヒューマンスケールにしているだけ、というミもフタもない事になる。こすって擦り切れるほどネタにされた、マジンガーが桜の木を折って、ミランダXにプレゼントしているVTRで笑いを取る。

そのVTRをアイドルダンスシーンに含ませている。ガワは違うが、ちょっとデートシーンがカットとして挿入されたりもする。マジンガーとミランダのコントみたいな事をやっていた頃から、そこは変わっていない。（けっこう不条理劇は見方がちょっと変わると笑いになる。ケラさんは別所さんの脚本を「笑い」の角度から読んでいた）

それも普段は平面線画によるアニメーションで、ライブシーンで変身よろしく3Dモデルがダンスする。このあたり、日本車が電気モーターとガソリンエンジンのハイブリット車の開発に優れている、組織の生産ライン上、そうせざるをえない背景（エンジン開発技術から電気モーターに切り替えられない）があるのだが、発生源のプリキュアダンスは、ピクサーのスタッフ&キャストロールの逆転現象といえるのか。

スーパーロボットの起源もあるが、もう一つの文脈として、高畑勲の『赤毛のアン』の妄想タイムをあげたい。マサラ映画の皆が踊りだすドリームタイムに近い事を今なら指摘できる。

だから『かぐや姫の物語』の走り出して十二単を脱ぐ、夢オチとされる劇が長い、口尺が長い事をしてしまう。

ブレヒトは意味の無い歌と踊りを幕間に入れるとされる。

『ハイジ』の原作を読み、神=宗教を抜き、アンでブレヒト演劇の中にある機械の神（批判）をうわえたのか、それはわからない。

妄想がなんというか、デウス・エクス・マキナを象った偶像、アイドルとして、機械仕掛けというより絵コンテ上のダイナミズムに神、「神」の似姿を写し取った、そんな神

の偶像が乗っているのが、『アン』では？

たしかにアンの物語は、アンの妄想を映像化しないと、ただかわいそうなみなし子のおしんみたいな、いたたまれない映像になる。(おしんは孤児じゃないけど)

かわいそうな境遇に空想力で、マリラおばさんもほだされる。これはアイドルアニメの構造、だけでなくアイドルの構造そのもの。皆、ほだされる。

成長するにしたがって、妄想しなくなる。これは意図しない演出。高畑勲は余裕が無いからと語っていて、それは製作の余裕が無いということ。別にアンが妄想する余裕が無く、マッシュの死とか、人生の岐路に立って妄想しなくなる。それは結果的にアンの成長を表現してしまう、そこはデウス・エクス・マキナが降りている。

エマちゃんが虹ヶ咲に出てくるのは、アニメ史的必然がある。

虹の先には・・・ここだけにしておく。オレたちの世界名作劇場で、点が甘くなってしまう。(だいたいハイジの頃からクララでカルーピス萌え豚劇場はロリコン向けアニメであるという批評を『無職転生』が出している)

クラリスはルパンのテレビシリーズに出てこない。(私の小説に出てくるキャラクターはクラリスの安売りです)

不条理劇とは神によって終幕を迎えず、かといって、カタストロフィが起きて、カタルシスも得られない。そういう話をするのに、なんでロボットとアイドルアニメの話を延々としているのか、こういう事を入りにしないとね。

金閣が天皇と言うようなもの。

## 後編

著作権が復活した「三文オペラ」でも、そのさらに遡った「乞食オペラ」でも、機械の神がやってくることに批判的で「乞食オペラ」では、なんかミュージカルなんだから、オペラなんだからハッピーエンドでいいとプレ・メタシアターな発言がある。作中の登場人物が言っている。

「三文オペラ」は近代演劇とは思えない、ストーリー展開と言うか、ジャンル劇批判と言うか、それは中世最後期(近代黎明期)とはいっても二世紀前の近世の演劇がご都合主義で、学芸会か、それ以下のお遊戯会(ただ俳優達が板の上で遊んでいるだけ)というか、批評性を持って、主人公に観客を同一化させないのである。

異化の見本としてのメッキ・メッサー、マック・ナイフ(刃物屋の息子? という意味になるか)を観客が「こんなヤツ、処刑されればいいじゃん」と思っている。それはそれでカタストロフィ劇としての機能をもって終幕するのだから、いいのかもしれない。(「百円オペラ」では面クリできない失敗で、それを表現している)

クライマックス、機械の神として白馬に乗って、ロンドンの警視総監殿がやって来て、今まさにメッキが処刑されるという時に、王様が即位したからメッキの罪は恩積、所領を与えて気前良く年金までくれる。

なんだ、これは。

どういう租税のシステムなんだと。

「百円オペラ」では一応、メッキには英インド戦争の論功行賞がなされなかったから、地位を与えられた…センの言うように「あきらめきった奴隷」たちから吸い上げて、メッキ・メッサーの年金が支払われているという、ポストコロニアル以後は、とてもおめでたくない理由がある。(さらに兵糧を戦地から調達した“遺体”を「サメの肉(マクガフィン)」だと言って兵士たちに食わせていた…「百円オペラ」とはそういう話である)

蜷川さんが生きていたら、メッキ・メッサーを東出くんでペガサスのように白馬で赤字である。(ジャッキー・ブラウンは六角精児かな?)

著作権が70年の延長で公開が難しいのだが、やってほしい。

一応、王権神授説では、説明がつくけど、王が神の権能を持っているからデウス・エクソ・マキナとして機能する。勅命あって、釈然としない解決。

「つじつまあわせですか？」

「つじつまあわせです」

と、オウム返しギャグ。

「三文オペラ」で使われた異化効果には、こうした機械の神批判を表現してしまう。SFが今までのストーリーのデータベースをSFで語りなおしできるように、プレヒト演劇もそれができるようだ。

『逆襲のシャア』の批判に聞こえたら、まずいけど、真面目ガンダム担当者の福井晴敏さんが「わけわからない」と言っていたが、プレヒト演劇に近い『逆シャア』三文オペラ説」である。

リアルロボットは機械の神ではなく、アクシズという巨大質量を押し返す事をできない、その現実を担保されているのが「リアル(現実)」ロボットである。

だからサイコフレームが機械仕掛けの神と化していると考えれば、一応近現代の演劇理論上は、説明がつく。サイコフレームで強化されたモビルスーツ。

叙事詩的演劇だけど、スタニスラフスキー以後の近代演劇を通過して、同一化ではなく異化効果として『逆シャア』は存在していると。

シャアの逆襲ではなく、『逆シャア』とはスーパーロボット、それに逆襲されてしまう。ヒーローものでは敵役がヒーローに負ける予言がされている。機械の神に。

こういう事をちゃんと「蜷川幸雄と富野良幸」で語ろうと、思っている。

その習作か何かだと思って、あきらめちまいなよ。

神から油をたらされて聖別されて、それで六角精児の頭にサラダオイルを「性欲丸」で「私は徳川家康。萌え豚は身をやつした仮の姿」という、どこにでも義経が出てくる大衆演劇的な、最終回で中山車丸が生み出した「魍」の玉を手にしてほくそ笑む。「冬の海」のパロディの感動はなんだったんだ。(ちょっと全年齢対象にふさわしくない言葉が…)

さて、気を取り直して、機械仕掛けの神ではなく、巨大な肉体の神の顕現として、ウルトラマンが出てくる。

機械の神と同じかということ、ドラマ展開を荒らした怪獣をやっつけて終わるのだから、確かにドラマツルギーはほぼ機械仕掛けに乗った神が出てくると等しいのは、否定できない間違いではない。

叙事詩的演劇に異化も同一化も巨大化という劇的回収装置に、そのまま回収されてしまう。これが20世紀末になると、誰かが使い始めた肥大した自己になる。巨大ヒーロー

があまり、活躍しなくなる。

『ウルトラマン』という特撮怪獣ヒーローもの、という箱に収まるドラマジャンルは、十年で使いきる。時代劇というのは、怪傑ライオン丸みたいなヒューマンスケールのヒーローに回収されて、ウルトラマンシリーズには回収しにくい。(後の平成ウルトラマンで実相寺回というのは昭和を時代劇に見立てた特撮批評)

できて、大映の『大魔神』。

ところがスーパーロボットの先行勝ちの期間は十年も無い。ジャンルとして寿命もあるが、応用できるドラマのデータベースが乏しい。(市場調査をすれば団塊ジュニア世代がすぐにスーパーロボットに卒業したのだろうけど)

リアルロボットに路線変更して語られるドラマを増やさざるをえない。

ウルトラマン系統は第一期十年ほどシリーズが続いてホームドラマ、熱血スポ根モノを出し切って、単純にネタ枯れて、新しいドラマを語れなくなる。(これはちゃんと福島亮太の本で書いてある)

それで始まった第二期、1980年のウルトラマンペイティは教師モノ、『ウルトラマン80』は赤羽で小銭くれる人(壇蜜)。

こういうのに、セブン原理主義者は反発して、子供向けなのに「子供っぽい」と批判する。「全てのジャンルはマニアが潰す」のである。

アマチュア特撮「帰ってきたウルトラマン」を当時ダイコンフィルムは作っている。批評性の高い映像作品になっている。

顔をそのまま出しているデウス・エクス・マキナ、核の使用という大カタストロフィを食い止める事が出来る眼鏡の巨人を庵野監督自らやるのである。

不思議な感動がある。

『ガッパ』に出たんだから、「パーフェクト・ヒューマン」にも出てほしい。

特撮史でも『マイティジャック』の高いドラマ性が受け入れられなかった反省で『ウルトラセブン』があると、言われる。

ファンメイクはえてして、オリジナルを批評している。オリジナリティの尊重がかえってオリジナルがもっていた瑕疵を広げることになる。このあたりに、原父殺しの芽が出ている。かえって父殺しになる。

実相寺昭雄の「狙われた街」はたまに投げる変化球だからいい。これを基準にするとよくない。

特撮はスポンサーに「子供向け」「子供向けに作れ」の重力があるから、リアル巨大ヒーローを作れない。だから「シン・ウルトラマン」が期待されるけど、リアル巨大ヒーロー路線は、成功作が無い。それは柳田理科雄の指摘通り怪獣が自重で死ぬなどの科学考証上、どうしても不都合が出てくるからだろう。

私なら、周りの空間を亜空間にして、自重も大丈夫。自衛隊の兵器が効かないから、巨大ヒーローの出番があると。

結果だけど、やっぱり原父殺しの何かがある。それは戦中に片足を失った庵野の父親に求めたくなるが、庵野秀明展を見に行けば、わかるんじゃないか。

ガンダムの話で悪いけど、ニュータイプはデウス・エクス・マキナの機能を持っている。ニュータイプのマクガフィンがサイコフレームであるという結論はある。

打ち切りが決定して、一年間の放送が1クール短縮。「そこをなんとか」で一ヶ月分延長、二ヶ月分切られる。たしかに全体のシナリオの長さを考えると、サイド3を制圧して、完全に宇宙地図からジオン領を無くして終わるのが「口尺」の長さとして正しいだろう。

そのためには、ニュータイプのアイディアを出して、オチを付けている。イデオンの本で「尺が無くなったから？ ニュータイプを出したんじゃないか？ オチが見つからないもんね」というファンが語っていたのを、その声を拾って「そうだよ」と富野監督が認めるという、ひっくり返される。

落語「犬の災難」で、犬に向って「お前が酒とつまみを食ったのか？」と問うと、「そうです」と犬が返事したような、

ニュータイプの内面世界、けっこう『赤毛のアン』のアンがする妄想タイムに近い。孤児アンがプレ・ニュータイプ説はこれから確証されるだろうが、富野監督が「自分は高畑勲の弟子」と言い出していて、考察されていけば、いずれつきあたるのでは？ で、最後に「そんなじゃねえ」と、またひっくり返される。

とはいえ怪我の巧妙か、残党を残してしまったために、いくらでも続編を作れてしまう。「ジュリアス・シーザー」の後に「アントニーとクレオパトラ」みたいな、それでクレオパトラ（妹の方かも）＝ハマーン・カーンなのだろう。（イタズラ心でアントニオ猪木と邦子パトラと書きそうになった）

ニュータイプ論は当時、新人類と呼ばれていた若者を意識的に英単語に市だけ、直訳だとニューヒューマノイドだと思われる。

『ターンA』は結果として、リアルロボットをスーパーロボットに戻す。

Aというエース、筆頭の意味（表音文字の表意文字化）があり、もちろんファーストガンダムのことだろうけど、スーパーロボットのことでもある。

デウス・エクス・マキナにひっくり返す。だけど、これは予定というか、4クールまでではなく、5クール目以降の話も考えられていて、一年間の4クールならば、スーパーロボットにして終わるしかなかったと思われる。

質量を持った残像の逆がニュータイプであり、質量を持たない妄想のビジョンを見せる。

S F魂で、ついつい辻褃あわせをしたくなる。

「つじつまあわせですか？」

「つじつまあわせです」

前述した高畑のアンを妄想タイムを引き伸ばした結果、リアルロボットの母は世界名作劇場説とするなら身体の拡張で機械の神の搭乗型ロボット、精神の拡張でニュータイプといえるか。

何故、強化人間が現れるか、アンのような天然物ではなく、作られた妄想を具現化しようと、師高畑と弟子富野の、神心同形論。

第三世代の舞台演劇は、舞台に機械の神を降ろさず、自分の身体に神を降ろす原点回帰、肉体の神、ウルトラマン派というか、シャーマスティクな演劇、結論はあるけど、そこまでの理路がまだまだ通っていない。

人と神がまじわるギリシャ神話

その古代ギリシャを舞台としたギリシャ演劇にこちらに

演劇の演出の話で、

スマブラで「ナンジャモンジャ劇場ステージ」では、蜷川さんがよく言っていた伝承の「桜の園」の桜の樹が倒れてくる。

なんか、館セットをぶち壊して、本物の木が倒れてくる、という。機械の神の機能、樹能を持つというか、それで終劇するという、それは襲撃であろう。海外の演出家の西洋の屋台崩し。

刺激されて、スマブラのナンジャモンジャ劇場のステージでは、リアできこり（きこり顔...トシオかな）が桜の木を切っていて、フロントに倒れてくるのを作りたかった。

BGM「三文オペラ」のオープニングの早回しで

屋台崩しをひたすら繰り返す、

クルト・ワイルの方が早く著作権が切れるのも、もう少しだから。（もう切れてる？）

ヴァリアントオブゼルダでは、金字塔ステージ、

光の箱に収まった、勇者のギガデインが光の壁を流れて、破壊しないと直接当たらない。

エネミーの夢を見る島を倒して、光の箱を破壊しないと、

スマッシュでファイターをブーメランにして

下スマッシュして島の地面にぶつかったら、浮いている島がひっくり返る。

シェイクスピアロマンでも、

クレタ島のクノッソス宮殿、ダイダロスの作った迷宮で戦う。迷宮がどこかと繋がっているのか、○かゆフィーバーとか、FEが川下だから出してもいい。

ダイダロス、イカロスの父でロウで羽を固めて張り合わせて、翼を作る。ロボットアニメの父がロボ開発者なのは、そのあたりが起源ではないか。

ハルの西宮騎士団の

小さい字指定

時代劇評論家の春日太一さんにはそろそろ評論家時代をやめて、時代劇ドラマの脚本を書け、と。それは政治評論家をやめて、派閥に入って取り仕切って、ポストを担いはじめる...なんなら、俳優が同じ擬似メイキングドラマで、春日さんがインタビューしているという、謎のメタ構造がある時代劇ドラマの脚本を書いてもらう。

光の巨人が出てくる時代劇とか、公害ではない怪獣の暗喩  
戦争という、巨大な怪獣、あるいは集合怪獣体が

どうせ一水会を解散して石破茂のように、政治評論家にとどまるというか、戻ると  
うか。「レコンキスタ」...つまり中国大陸の失地回復するつもりなのか？

絶対ことわるから、「おみやげ下さい」で、おみやげがないと帰れないから。たまに企画は無いの、「おみやげ」だけをもらいに行く、

校舎を望むグラウンドの上に立ち、ジャージ姿でフェイスタオルを首にかけて、夏目房之介みたいな表情を浮かべて写真を撮る。『時代劇聖地巡礼』とまったく同じことするだけだから。

「開発終了」の画像。

もうひとつ、学校のプールサイドでセーラー服を着て、HKみたいな仮面を被り、女性モノをつめた紙袋を抱えて、

「ブルセラムーンは、やめさせてケロ」

☆このように

「デウス・エクス・マキナ論」はおまけ  
なのでまだ未完成である

消費税分のサービス

嫌儲は これでも文句を言う

S & M 3 で存在に触れているので  
一応 掲載

## わかりやすさの陥穽

斎藤美奈子が喫茶店か、どこかで盗み聴きした若者たちの会話がある。

「シェイクスピアって何？」

と、同じくロミジュリというのは、なんだろう？ 戯曲名は知っているも、具体的にその内容、話の筋は知られていないというか、それでもだいたい大筋は知っている、はずである。

勿論まったく知らない人もいるが、それならこんな学者でもない人のくだらない解説なんて読まない。（「シェイクスピアロマン」の作者だけど）

新教と旧教の対立をモンタギュー家とキュピレット家の争いに擬えるのは、もちろん誰でもしているし、素材源を料理する時に、それを何かに代入している。

そもそも新教はプロテスタント（派閥がいくつ分かかれる）、旧教がローマカソリック（やはり派閥が割れている）という事を知らない人は、解説を読まないだろう。

まず、ヨーク家とランカスター家の争い、その辺りを模したのだろう。ヘンリー八世はマーガレット・ソールズベリーを処刑した。プランタジェネット系の人物である事を鑑みると、新旧の宗教戦争より、こっちの薔薇戦争の争いの方が、正しそうだ。ヨークとランカスターは、ヘンリー七世とエリザベスで両家合体したはずだけど、その息子の代でもまだ燻っていたらしい。

スコットランド国と地続きの英国との争いにも、擬えられる。

血気盛んな若者たちのケンカがあるから、『ウエストサイドストーリー』の素材源として、選択されたのは正しい。

文学者・大橋洋一さんの話では、男子高校生の妄想が表現されている。確かに男子たちの会話は、もう古くなってしまっているが『行け！ 稲中卓球部』や『男子高校生の日常』の男子のじゃれあい・ごっこ遊びから、拙い恋愛まで現代に通じる。大きい違いは固有名詞が違う点だろう。

イギリスからは、ヴェローナは東の果てのように遠い場所、ポーランドの人にとって、西の果てのようなところが、ニューヨークのウエストサイドであったという事だろう。

それを言うなら、イーストエンドとウエストエンド、逆に本国でできない事を遠国でできる。

たとえば同性愛者の男同士か女同士で秘密結婚するとか、現在でも語りなおそうと思えばできる。

所属する組織がLGBTを排斥するような組織団体、もちろんホモフォビアな兄弟同盟であり、教会のやり方に反対な破戒僧が男同志、女同士を秘密結婚させる。

そういう物語が現代解釈だろう。

これは近現代人でもわかりやすくした、結果にすぎないだろう。三島由紀夫の『金閣

寺』の金閣を天皇と解釈するような、それは百万人にわかるようにするつまらなくする言説と同じではないか？

「萌え」を「それはお金を払ってしまうくらいかわいいという事」と、行間をミキサー車を出してコトバのコンクリで埋めてしまうような、暴力団が死体を出てこないように埋めるような事、「ぼくたちが大切に愛でているものをそんなご無体な」と、文句を言いたくなるのはわかっているが、百万人にわからなくなる。

百万人にわからなくていい、というなら、それは三島の選良主義につながる。小田島雄志さんなら、何かに萌える事が出来るのは、「萌エリート」とか、これから書くことはこんなギャグばかりだよ。

私の『金閣寺』の金閣\*1はなんなのか、という解釈（不必要）は三島の美学だ、と言える。

一般に使われる「美学」ではなく、文学の芸術的価値を規定する美学の方である。

その美学は横からキッチュと言われたら、崩壊するような危なっかしさを持っている。確かに美文調美文体、それは書院づくり僧院づくりのように造れば技術的に高い。ところがそれに金箔を貼って、字義通り箔をつけるのは近代になると、それは本当に「美」なのか？ ただの成金趣味的に見えてしまい、ただ経費がかかっているだけではないのか？ ある日ブルーノ・タウトがやってきて「キッチュ」と殺し文句を横から言われたら、放火されたような気になるのも、なんとなくわかる。

15の夜の替え歌、50の夜みたいに放火された側の小説はないのか？

(私は宇治動画・・・でそっちを)

運よく、三島信奉者のドナルド・キーンという翻訳者と出会い、彼のおかげで日本の戯曲といえばミシマという、フランスで高い評価をえる。

杞憂に終わったのであるが、三島の後半生は美学から政治になってしまう。(それについては他でいろいろな文献があるので語らない)

さて当時、女性が舞台に出て芝居をするのは、風紀を乱すとして禁止されていた。もちろん、皆さんご尊耳（こんな言葉は無い）である。そこで変声前の男の子が女装して女役を演じていた大和言葉で「女形」をしていたのである。資料に拠ると、よく訓練されて高給取りだったとされる。

そんな少年俳優はびえろ魔法少女だったという事である。変声前の少年俳優に女性を演じさせて、場合によっては一回りも二回りも年長の女性を演じる。位の高い女王などを演じる。

それは魔法の力で女兒が少女となるのと変わらないサンリオびえろランド（サンリオぴゅーろランドをそもそも知らない）である。太秦の時代劇村のプリキュアみたいな、秘密のアッコちゃんに変身して誰かになりすましをするようなものだ。

少年愛、若衆道といったものは、後付の創作と思われるのだが、このあたり、影ではちょっとやっていたらしい。

小田島雄志さんなら家と家の間で「陰間」とくだらない事を書くだらう。ただ、困ったことに黒太子の息子、リチャード二世が同性愛者でお世継ぎ問題が起きてしまう。(悠仁さまが二十分の一の確率で同性愛の遺伝子を生得的に発現したら、どうなるのだろうと、現実起こりえる問題を考えるヒント)

まずドイツ貴族の娘を娶るが、うまくいかなかった。英国の風土が合わなかったのか、すぐに亡くなる。また偽装結婚でイザベラ（幼子）をもらい、マルキ・ド・サド的生活をしていたのかは、定かではないが、ソドミーであったのは確実であるという。

モウブレーとポリンブルックがボーイズラブをするのを止めてしまう、「ケンカの後の朝チュンが見たかったのに（全年齢対象）」という、女性読者の期待を裏切ってしまう。

場合によってはリチャードⅡ世が「モウブレー ぼくのモウブレー」と『風と木の唄』のギャグをしていたかもしれない。それでワザと追放になるようなケンカをふっかけた。

どうでもいい事は止して、場合によっては、おじさんお婆さんな俳優が乳母を演じていたかもしれない。

まっそんな時期も王政復古（レストレーション期）になって、女優さんが舞台上で活躍できるようになる半世紀ほどの限られた時期（初上演から約60年）しかない。歌舞伎と比べれば、である。二世紀以上女形をして徳川幕府の瓦解があっても、いまさらやめられない。そんな伝統化はなかったのである。

水平的にも、十六世紀後半にはイタリア演劇、フランス演劇では、もう女優が出ていた。男装女装も、変声後の男性俳優が演じるための苦肉の策で、演じられたのではないか？ カストラートの男優はいたのか？（ギリギリ十七世紀から十八世紀にイタリアで活躍したから、フィクションの世界なら登場してもよいだろう）

相当な美少年がジュリエットをやらないと、「お金を払ってしまうぐらいかわいいという事」にならない。

歌舞伎というより、逆宝塚歌劇だった。

宝塚歌劇でも沙翁戯曲をかけることがあるが、女性だけでロミジュリをやれば、当時の男優だけの芝居を性別反転させている事になる。

山田邦子が新春かくし芸大会で、クレオパトラを演じたくらいの違和感が、男性がクレオパトラを演じる時に…クレオパトラを演じる時にあっただろう。

まあ～普段、しっかりした紳士が年末年始の余興に女装するような、笑いに寄せた事だけど、フォルスタッフの女装のような、そんなものに近かったのである。

事実、「マクベス」初演時にマクベス夫人役の少年が、熱を出してシェイクスピア本人が代役したという。

だから女性を演じていたという少年俳優がまことに愛している男性俳優で、それは『霸王別姫』の俳優たちだろう。もしかしたら、「これは中国版のロミジュリだ」と誤解してくれて、カンヌ映画賞をとれたなら、もうやっている事になる。戯曲に書かなくていいか。

ボーダーのやりとりはメアリー・スチュアート（女王メアリーではない）の逢引で、密会しているところを父親に見つかってしまい、哀れ、愛しの人「娘によくも手を出したな」と、殺されてしまう。

う～ん。（悩み）

ここでお父さんが許してあげれば、カソリック系の英国が地固めできたんじゃないかという、妄想があったか、どうかまでは、手がかりとなる文献は無く、わからない。

神父のやばい薬で、仮死状態になるという…これって、キリストが誰かにもっていて、気付薬で起して復活というメンタリズムをバラしてないか？ 「ジョン王」を暗殺

した薬も、修行僧が出していて、何かあると勘繰りたくなる。

ブリテンルネサンスの十六世紀で、東洋文献と共にアラビア化学が知識として入ってくると、想像の中ではありえる、思える。『ダ・ヴィンチ・コード』で勝手な憶測のマグダラのマリアとどうにかなっていたのもあるが、なんでこんなに宗教家が薬物に精通しているのか、いろいろと思いを巡らせると、そこはキリストが薬物をメンタリズムに使っていたと突き当たるのである。教会の秘事として隠してたんじゃないか？ 教会に反抗的な王侯を謀殺していたのではないか？

ロレンス修道士の秘密結婚には、何か符号を感じないでもない。一応、両家が仲違いしているから、二人を秘密結婚させてしかるべき時（懐妊とか）、公開するときには「仲な～おり♪」と、そういう深謀がある。

もしかしたら、ヨークとランカスターの合体を目指して、間を取り持つ教会の重鎮が、機能していない、ダメだった人をモデルにしていないか。（このあたり『ビヒモス』にも語られている）

『七人のシェイクスピア』を読めば、エセックス伯がウォルシングラムの娘と結婚してエリザベス女王を失意させる場面がある。その他、いろいろな事情で政略結婚させられるから「既成事実を作ろう」というロレンス神父の神を信じる楽観めいた希望が表現されているだろう。

後に古代、紀元前に舞台を求めるのは、キリスト教を直接批判しているわけではないが、そういうシーンだと思われる。キリスト教徒では表現しにくい。

コーディーリアもキリスト教徒ではないから、美德を持ちながらも死す。そもそも名前が真心を意味する Cordial の女性名である。（「真実は美しい」という女の子で真美・真美子みたいなモノであるが「美しい海」という意味もある）

マルキ・ド・サドが夫人ルネをモデルにしたと三島由紀夫が勝手に言っている『ジュスチヌ』三部作はキリスト教徒でありながら、美德を持った者が天国にはいけない悲惨な最期を遂げる。そんな物語を書いたら、発禁になる。だから「表現の自由」が理由で原稿が国宝になる。

このことを踏まえると、コーディーリアが死んでもいいのは、キリスト教徒ではないから、いいのである。

ただオフエリアの溺死、これが自殺の嫌疑で墓に入れられない、という議論がある。

審判の日に蘇って、神の裁定を受けて、天国に行けるか、地獄に落ちるか。天国と地獄の間、煉獄に縛られるか。そもそもそれがわかっているなら、墓を作らない。

現世利益に邁進しちゃいけない、宗教に基づいた倫理がこうして生まれるのは、地獄というフィクションを設定しなければいけなかった。

史劇ではない創作で悲劇を作る場合、キリスト教、布教以前となる。

プロテスタントはもとより、カソリック教徒にもジェーン・グレイショックがあったと思われる。

改宗してしまえば、処刑は免れたが、しなかったのである。

それで詰腹、現代で言う後追い自殺があったか、その点はまあ、資料を追って行けばそのうち、おいおい、突き当たる、はず。

まあ何がいたいかというと、九日間の女王が九日間の妻の元ネタではないか、ジュ

リエットを擬えられるようなのだ。例の薬で、仮死状態から「復活」の暗喩も「擬え」がこめられている。ジャンヌ・ダルク生存フィクションのように、ジェーン・グレイ生存妄想、それは新教徒にとっては、「神話」だった。

「神話」を求めたくなる宗教弾圧があった。

新教徒弾圧でブラッディメアリーと呼ばれたクイーン・メアリーから、エリザベス女王になって今度は旧教徒弾圧である。現代で言えば、左右二大政党が政権交代する度に、ポストを失って失脚するような、それどころか殺されるのである。

だから、「血の悲劇」とは当時の人にとって、リアリズムあるフィクションである。こうした流行劇で沙翁が戯曲を書いて人気を不動にしたらしい。流行ではなかったら、デビューすらできないものであるが、習作時代、喜劇時代、悲劇時代、浪漫劇時代、その間に流行り廃りがあったらしい。NTRものとか。

現実に信仰で死人が出て、リアリティーがあった。信仰≒恋愛に置き換えられた信仰劇≒恋愛劇の舞台演劇を観ている。

信仰が違う、新教徒のところに旧教徒がいると、追放される。教区ではなく、「租界地」のような場所に送られる。だから、ロミオは南のマントヴァに追放される。(江戸時代の所払い)

旧教徒と新教徒の争い、上演ができない。

現代では、舞台ではできる。しかし、キリスト教の番組が日曜にはある、テレビラジオでは放送できない。ここにイスラームとの格差が出来ている。

現代人にもわかるように、ギャグを塗したり、当時の歴史事情も語ったり、できるだけロミジュリ理解に読者を導くように書いてきたが、果たしてそれは、正しかったのか？

わかりやすさの陥穽にただ、盲目的な読者を嵌めるだけではないのか？ 『スターウォーズ』の「アム・ユア・ファーザー」のギャグの親子反対、盲いた父に浮浪者トムが「私はあなたの息子です。浮浪者に身をやつしていたのは、仮の姿」と、言っちゃったら驚いて父が死ぬような、わかったようなわからんような、そんな解説。

注意書き 一応、坪内版の「ロミオとジュリエット」の翻訳版を読みやすくした「労働」もして、販売。そこでつける、私の解説が、コレ。

\*1 放火された時点の金閣は現在のような金箔を貼っていない。仕入れた情報によると、綺麗寂で日本人の美的感覚に合っている。これなら犯人である林養賢が「美に対する嫉妬」と、犯行動機を語るのも、それほど意味不明には受け取れない。

今の金閣は、字義通り焼け太りした成金趣味で、あまり良くない。その辺りも三島を刺激するところがある。



廣告



# U2 UからsakUへ

須藤がバックハンドブローで栄光を掴んだように、ローリングソバットでセオリーを蹴っ飛ばせ！

アマゾンキンドルで配信

shiKOUUCOKU008.jpg

大人になったら  
ジブリを  
卒業しなさい



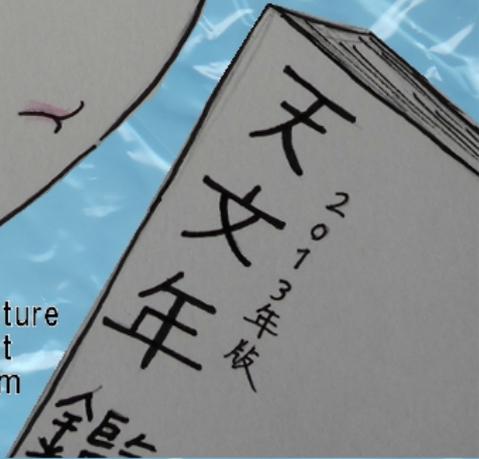
amazon  
キンドルにて  
配信 300円+税

coucoku51.jpg

広告

マンガとかを「天体観測」

Architecture  
Product  
System



koukoku03.jpg



マンガレビュースペシャル

兄になりたかった人

持論の寺田ヒロオ評

完成

価格 百円+税

マンガレビュースペシャル  
兄になりたかった人  
持論の寺田ヒロオ評

五島千尋

Architecture  
Product  
System

coucoku27.jpg



---

高校生の口演劇入門

---

著 五島千尋

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---